

士官学校の生徒達...そしてベ〇スを待ち受ける快樂の罫...

士官学校の女神たち

FE風〇雪月 異種姦CG集

DEEPRISING

士官学校の女神たち

CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！
画像の無断転載・加工を禁止します！

Reprint is prohibited !

士官学校の女神たち

序章

セイロス協会本部…地下会議室

フォドラ大陸中央 ガルグ＝マク大修道院の遙か地下…

1000年前に作られ数々の歴史的な遺産が収められた
聖墓へと続く道…

その間に隠されているのは…

極限られた者たちしか知らない秘密の部屋が存在する

セイロス教の長い歴史の中で暗躍し続けてきた教会の闇…

常に協会の裏にあり続け陰ながら

教会の活動を支えてきた組織が極秘の会議を行うための
用意された場所であり

最高指導者である大司教「レア」や

その補佐を務める「セテス」ですらそんざいを知らない部屋

その極秘の部屋に4人のローブを纏った男たちが
無言のまま椅子に腰かけていた

教会幹部「さて…本日の議題だが…、
既に知っていると思うが先の士官学校学級長たちと
盗賊の件についてそれぞれの意見を聞きたいと考えている。」

太った幹部「たしか…

賊に追われ村へと逃げ込み…

傭兵団に助けられたという話しでしたな…？」

初老の幹部「まったく…

士官学校の学級長ともあろう者たちが…良い恥さらしじゃわい…。」

闇に蠢く者の使者「……………」

士官学校の級長に選ばれた3人の生徒たち…

次期帝国皇帝とされるエーデルガルト

神聖王国王子 ディミトリ

諸侯同盟盟主の嫡子 クロード

フォドラの将来を担うと言っても過言ではない三国の代表たちがたかが盗賊相手に敗走し、傭兵団に助けられたという事件は各国とつながりがある教会幹部たちにとって非常に不名誉で腹立たしい事件となっていた

士官学校の教育について他国から不満の声が上がるのは間違いなく今後、政治や外交において大きな影響が出ることは間違いなかった

士官学校を運営することで各国とのつながりを強くし同時に大きな利益を得ている幹部たちとしては非常に困った事態となる

教会幹部「さて…使者殿…エーデルガルトはあなた方からも強い推薦があった…

それがこの様では我らも今後のことを考え直さねばならんな？」

闇に蠢く者の使者「今回の一件については彼女をあまり責めないでもらいたいところだが…、たしかに我々も彼女の次期皇帝としての器にふさわしいか、改めて見極める必要があると考えております…。」

太った幹部「ほう？ 見極めると…

一体どのような手段で見極めるというのでしょうか？」

闇に蠢く者の使者「…かつて士官学校で行われていたという…ある訓練を再開してみてもいいかでしょう…？」

初老の幹部「ほう…？ あの訓練か…非道と言われ封印された。」

太った幹部「なるほど…あの訓練ならば…体だけではなく心までも鍛えることが可能でしょうな！」

教会幹部「ふん…お前たちは若い女を抱けるからと喜んでいるだけだろう…だが…士官学校の落ちた評価を取り戻すには最適かもしれん…それに…。」

闇の蠢く者の使者「あの教師…ですか…？」

教会幹部「ふむ…レア様がただの傭兵を教師に据えたことが理解できんからな何か企んでいる可能性が高い…そのためにもあの教師は徹底的に調べ上げ可能なら我々の手駒にしたいところだ。」

闇に蠢く者の使者「それならば…あの訓練はまさに最適かと…。」

薄暗い地下室で笑い合う男たち…
大司教レアや教師ベレスの知らぬ間に…
大きな陰謀が動き始めていた

◇数週間後…

エーデルガルト「先生…今日もお疲れ様。」

ベレス「エーデルガルト…」

授業を終え自室へと戻ってきたところを
エーデルガルトに声を掛けられたベレス

帝国皇女であり次期皇位継承者であるエーデルガルト
数週間前に盗賊に襲われていたところをベレスと
その父「ジェラルド」率いる傭兵団により救助される

その一件以降…ベレスの事を一目置くようになり
黒鷲の学級を彼女が受け持ったことで
次第に信頼を築くようになっていた

黒鷲の学級では主に帝国出身の生徒達が所属しており
個性豊かな面々が揃っている…

ベレス「ちょうどよかった、一緒に来てくれる？」

エーデルガルト「えっ？なにかあったの？」

ベレスは教師としての立場以上に生徒たちと
あまり関わろうとはしない
あまり表情を変えることもなく感情表現が乏しく見える

そんなベレスに突然一緒に来てと言われ戸惑いを隠せない

ベレス「さっき教会の使いが来て、
エーデルガルトと一緒にこの部屋に来てくれと言ってきたんだ。」

エーデルガルト「そうだったの…
でも突然の呼び出しなんて、何かあったのかしら…。」

指定された場所は修道院から外れた教会のとある施設…
周辺は倉庫が立ち並んでおり人通りは少ない

エーデルガルト「そういえばこの辺りに来るのは初めてね…。」

ベレス「…かなり寂しい場所に見える。」

エーデルガルト「そうね、修道院の周辺とはまるで違う…。」

人通りの少ない道をさらに奥へと進み、
完全に人気の無い路地へと入っていく二人

エーデルガルト「たぶん…ここよね？」

ベレス「ええ…間違いない…はず。」

二人が辿り着いた建物は…教会が所有しているらしく
それらしい外観をした建物であった

だが…

エーデルガルト「あれは何の印かしら…見たことないわ。」

ベレス「セイロス教の印に似ているような気もする…けど。」

謎の印が刻まれた扉の前に佇む二人…

すると …扉はゆっくりと開きベレスの元を訪れた
使者が姿を見せた

使者「お待ちしておりました…。」

ベレス「…ここに間違いないみたい。」

エーデルガルト「そう…。」

使者に案内され建物の奥へと足を進める二人…

内部はいたって普通の教会の施設のように見える…

そして…

教会幹部「おお、よく来られたな…ベレス殿にエーデルガルト殿…。」

そこにいたのは教団幹部として知られている中年の男性であった

エーデルガルト「始めまして、帝国皇女エーデルガルトと申します。
そのお名前は帝国で何度も耳にしたことがございます…
たしか教団の財政面での功労者だと…。」

教会幹部「私をご存じだとは…恐れ入りますな…
さて、本日お二人に来ていただいたのは、
今後の士官学校で行う予定の特別授業の内容に関して…
ご相談がありまして…。」

ベレス「特別授業…ですか？」

エーデルガルト「先生の授業には何も問題は無いと思いますが？」

教会幹部「ええ、もちろんベレス殿は想像以上の成果を上げております…ですが…我々としてはさらに生徒達のレベル向上を目指しております…また盗賊相手に助けを求められては教団としても困りますので…。」

エーデルガルト「そ、それは…！」

エーデルガルトの頭の中に様々な考えが浮かぶ…彼女の野望…強い想いは決して揺らがないその目的の為にも…ここは教会側の言い分に合わせておくことが最善であると判断した

エーデルガルト「たしかに…あの盗賊の件では恥ずかしいところをお見せしてしまいました…。」

ベレス「ですが、あれは盗賊たちの数が多すぎました…エーデルガルト達にはああするしかなかったことも事実です…。」

エーデルガルト達を庇おうとするベレス…

教会幹部「ええ、済んだことを咎めても仕方ありません…ですが二度とあんなことの無いように…改めて教育方針を考えなおす必要が出てきたのですよ。」

ベレス「それで…特別授業を行う…と？」

教会幹部「はい…もちろん先生にも参加して頂きますよ？」

エーデルガルト「断る理由は無いわね…先生。」

ベレス「ええ、…だけどどんな授業なのか…よく知っておきたい。」

教会幹部「たしかに！

ではさっそくこれからお二人に直接指導いたしましょう…
こちらへ…。」

幹部の男に招かれさらに奥の部屋へと案内される二人…

使者「ベレス殿はこちら…

エーデルガルト殿はこちらの部屋へどうぞ。」

エーデルガルト「え、ちょっと…先生とは別なの！？」

幹部「教師と生徒ですからねえ、違って当然でしょう？」

エーデルガルト「それは…そうね…。」

幹部や使者の態度に疑問を感じながらも拒否するだけの材料が無く
従うしかないエーデルガルトとベレス

ベレスが案内された部屋…

そこは大きなベッドが置かれた大きな寝室のような場所であった…

ベレス「ここで訓練を…？」

幹部「まだ十分な準備が整っていませんのでな、
ひとまず今日はこの部屋を利用いたします…。」

ベレス「そうですか…。」

言葉数が少なく感情を表に出さないベレス…

幹部「でわ…まずはこれを飲み干して頂けますかな？
これから行う訓練の効果を高める…教団秘伝の飲料です…。」

ベレス「すごい色…美味しくは見えないから、
もう少し改良したほうがいいのでは？」

幹部「…そ…そうですね、見た目も大事ですからな…
検討いたしましょう…さあ、グイっと…飲み干して…！」

ベレス「…でわ…。」

言われるままその飲み物をすべて飲み干していくベレス…

ベレス「はあ…はあ……見た目通りの…味です…。」

幹部「くくく、仕方ありませんな…
嗜好品というわけではありませんから…。」

飲み干し…顔色を悪くするベレス
頭がグラグラし…立っていることが困難になり
ベッドの上へと腰を下ろした

ベレス「気分が良くないのですが…こういう副作用が…？」

幹部「ご心配なく…それは想定内のものです…やがて体が熱くなり…
服を着ていられないほどになりますよ？」

ベレス「…うっ…たしかに…体の奥から熱くなって…あああっ!？」

体をビクつかせ地面へと倒れ込むベレス…
全身突然激しい刺激が走り…力が抜けてしまった…

ふと視線を下ろすと…
自分の太股から流れ落ちる大量の愛液に気付いた

ベレス「こ…これは…!？」

さらによく見てみると…自分の股間がぐっしょりと濡れており大きな染みが浮き出ていたのであった

幹部「これは…想像以上の効果ですな…
もしかしてベレス殿は処女でしたかな？」

ベレス「これは…一体どういうこと…!？」

幹部「見ての通りですよ…
体の感覚を高めあらゆる刺激に敏感になる秘薬…
媚薬のようなものでしょうか…効果はケタ違いですがね。」

ベレス「そ…そんなものを使ってどんな授業を…？」

幹部「もうおわかりでしょう…？」

ベレス「うっ…あぁっ!？」

幹部の男に胸を鷲掴みにされたベレス

それだけで想像を超えた激しい刺激が走り秘部から愛液が溢れる
全身を大きく震わせ抵抗しようにも力が入らず…
胸を揉まれ乳首をいじりまわされても
ベレスは男の手を振り払うことができなかった

ベレス「あっ…あぁあぁあっ!？」

幹部「これは想像以上の見事な体をお持ちですね…
傭兵や教師にしておくのはおもったいない…!？」

抱き着かれ腰から尻までを撫でまわされるベレス…
触れられた場所はまるで
性器になってしまったかのように敏感な反応を見せ身を悶えて喘ぐ…

幹部「でわ…訓練を開始しましょうか…。」

ベレス「あっ…待ってっ!？」

ベレスの服へと手を伸ばし…脱がし始める幹部
必死に抵抗しようと手を伸ばすベレスだが…
まったく力が入らず男の手を掴んでも掴むこともできない

何も抵抗できず…下着までも下ろされてしまった

ベレス「や…やめてっ…!？」

幹部はベレスの股間へと顔を埋め激しく舌で秘部を舐め回し始める

ベレス「ああああああああっ!??」

何倍にも高まった性欲と感覚に襲われ
ベレスはすぐに大量の潮を何度も噴き上げてしまった

ベレス「はあ…ああああ…あああ…。」

ほんの数分秘部を弄ばれただけでぐったりとし
抵抗する気力すらも奪われたベレス…

幹部「ほら…こちらに尻を向けてください…。」

ベレスは幹部に言われるまま従い…豊満な尻をぐっと突き出す

幹部「実に素晴らしい…でわあなたの処女を頂きます…
よろしいですね？」

ベレス「あっ…ああ…はいっ……。 うっああああっ! ???」

男は肉棒を一気にベレスの膣内へと挿入させた



ベレス「あっ…あああああっ!？」

幹部「…すごい締めりです、素晴らしいですよベレスさん！」

ベレス「あぁっ、ダメ…そんな激しくっ…あはぁっ!？」

豊満な乳房を大きく揺らし悶えるベレス
媚薬の影響により体に苦痛を感じることはなく
ただ肉棒が与える快樂だけが彼女の体に伝わる

初めて経験するセックス…
戸惑う事ばかりであったが
薬の影響と激しい快感に頭の中は真っ白になり何も考えていられない

ベレス「こんなに…気持ちいいなんてっ…!？」

感情表現が乏しいベレス
今まで全く興味が持てなかったセックスに激しく興奮し…
満喫している自分自身が信じられない

ベレス「あっ…あああああっ!？」

◇同時刻…エーデルガルト

エーデルガルト「この部屋で…特別授業を行うの…？」

エーデルガルトが案内された部屋…殺風景で何もなくて
ただ中央に椅子が置かれているだけであった

使者「ええ、必要なものはこれから部屋へと運びます…
座ってお待ちください。」

エーデルガルトは言われた通り何の変哲もない椅子へと腰かける…
だが

エーデルガルト「な…なに…これはっ!？」

椅子に座った途端…

全身が痺れる感覚に襲われ手足の自由が効かなくなる

エーデルガルト「これは…魔法が仕掛けられているのねっ!？」

椅子には彼女には見えない位置に拘束の魔方陣が刻まれ
座った者の体の自由を奪う仕掛けが施されていた

使者「ええ、ちょっと手荒になってしまいますが…お許しく下さい。」

エーデルガルト「この技術…帝国で開発されたばかりの…
あなたまさか…!？」

使者「…私はただの使者ですから…何のことかさっぱりですね。」

エーデルガルトはその男の正体に気付いた

協力関係を結んでいるが決して折り合わない帝国内の闇の組織…

エーデルガルト「一体どういうことっ！
こんな形で私に何をするつもり…！？」

使者「…さあ、入りなさい…。」

エーデルガルトの質問には応えず…
使者は何者かを部屋へと招き入れた

部屋へと入ってきたのは…見るからにエーデルガルトが嫌う
だらしなく女にしか興味が無いといった様子の中年の男…
ズボンの上からもハッキリわかるように肉棒を反り立たせ
エーデルガルトのことを食い入るように見つめている

エーデルガルト「ちょっと…まさか私を…？」

使者「このままでは不便なので…体を縛らせて頂きますね…？」

エーデルガルト「いやっ…ちょっとやめなさいっ！！」

魔方陣により自由を奪われたエーデルガルトの体を
縄で椅子へと縛り付けていく使者…

両足を大きく開いたまま椅子に固定されてしまったエーデルガルト…

使者「魔方陣が発動したままセックスしては、
この男までも体が痺れてしまいますからね…縛り上げるしかないんです

エーデルガルト「…セックス…な、なんでこんな真似をっ！？」

顔を真っ赤に染め使者を睨み付けるエーデルガルト

使者「盗賊の一件から我々の間ではエーデルガルト様が次期皇帝に相応しいか…議論が再び沸き起こりましてね…それを証明して頂こうということになったのですよ。」

エーデルガルト「こんなことをしてそれが証明できると…？」

使者「もちろんです、国を統べるには様々な犠牲が付き物ですから…この程度の苦痛で根を上げるようでは…我々の上に立つ器とはとても思えません。」

エーデルガルト「くっ…そのために…教団にまで根回しを…？」

使者「…私はただの使者ですから…そこまでは…。」

男「ああ、…もう我慢できねえよ…いいだろ？」

使者「ああ、どうぞ…自由に犯してあげてください…孕ませるつもりでどうぞ彼女は特別なので多少乱暴にしても大丈夫ですから。」

男「おおっ、絶対に孕ませてやるだぞっ！」

エーデルガルト「いっ、いやあっ…近づかないでっ！！」

男はエーデルガルトの服へと手を掛けると強引に引き裂いた

丸出しになったエーデルガルトの秘部を激しく愛撫し男立ててしゃぶりつく…

エーデルガルト「いやああ、うっ…ああああっ…！？舌が…奥までっ！？」

男の長い舌が膣内にまで入り込み内部をかき回す…拘束されたままエーデルガルトは悶え喘ぐ

エーデルガルト「あああつあ…あああつ…やめて…こんなこと…っ！
私をはじめてなのっ…！」

男「処女か！やめるわけねえだろ！
ほら…俺の極太の肉棒…奥まで挿れてやるぞっ！」

エーデルガルト「いっ、いやあああああつっ！？」

目の前に反り立った極太の肉棒が姿を現すと
顔色が真っ青になり体は恐怖で震えだす

だが…男は少しも躊躇することなく肉棒を秘部へと押し付け
強引にエーデルガルトの膣内へと押し込んでいった



エーデルガルト「あがああああっ!？」

苦痛に顔を歪めるエーデルガルト

男「おお、最高だあっ…こんな良い女を好きに出来るなんてなあっ!」

エーデルガルト「いやあ、抜いてええっ!？」

男は激しく腰を振り彼女の体を大きく揺さぶる

固定された椅子ごと大きくガタガタと音を立てて揺れ動き
エーデルガルトは激しい苦痛に涙を溢れさせていた

エーデルガルト「うっ、あうっ!？ 奥まで…入ってきてるっ…
でも、負けない…私はこんなことで…負けるわけにはっ!」

自分を犯す男を睨み付け懸命に耐えるエーデルガルト

だが…次第に高まってくる快楽…全身が熱くなり息が荒くなる…

エーデルガルト「あああっ…ダメ…おかしくなるっ…ああイクっ!？」

男の激しい攻めに耐え切れず絶頂を迎え、大量の潮を噴き上げた

エーデルガルト「あがっ…ああっああっ…!？」

意識がもうろうとし…頭の中は真っ白になりつつあった

男「大量に吹いたなあ、そろそろ俺もイキそうだど!
たっぷり注いで孕ませてやるからなっ!」

エーデルガルト「いっ…いやっ…中だけは…やめてっ…。」

さらに男は激しくエーデルガルトの体を揺さぶり

肉棒を根元まで挿入させ膣内を掻き回した

使者「想像よりも早かったですね…。」

闇に蠢く者「そのようだな…我々の最高傑作だと思っていたがまさかこんな弱点があるとはな…。」

使者「この機会に…特別訓練で鍛え上げるのもいいかと…。」

闇に蠢く者「ふむ…快樂に弱いほど…扱いやすくなるというものか…。傀儡とするもの不可能ではないかもしれんな…。」

使者「でわ…。」

闇に蠢く者「よかろう…訓練でたっぷりと快樂の味を覚えさせてやれ…それからベレスという教師も同様にな…。」

使者「おまかせください…。」

士官学校の女神たち

1章

レスとエーデルガルドの特別訓練から一週間…

ソティス「お主…一体何をしておるのじゃっ!？」

ベレス「私だって…望んでいるわけじゃ…。」

自室でベレスが話す相手は…「ソティス」
ある時突然ベレスの意識の中に現れ交流を持つようになった
謎の多い少女…

ベレスにしかその姿は見えぬ…
その原因や自分が何者かさえも覚えていない

ソティス「たしかに、まさか媚薬も盛られるとは思わなかったが…
油断しすぎではないのか？」

ベレス「それは…反省してる…。」

ソティス「…ワシに隠し事はできぬぞ…ベレスよ
お主、あれ依頼体がうずいて仕方ないようじゃの？」

ベレス「な…なんでそれをっ!？」

ソティス「われらは言わば一心同体じゃからな…
隠し事はできぬぞ…？」

ベレス「こ…こんなこと初めてなんだ…
私は一体どうしたらいいっ…？」

ベレスは自分の体の中で高まり始めた性欲に戸惑い
感情の制御にかなり苦勞している様子だ

ソティス「まあ…年頃の乙女じゃからのう…無理もないが…
ん？年齢不詳じゃったか…？」

ベレス「…それで…どうしたらいい？」

ソティス「やれやれ世話が焼けるのお…
お前がしっかりしないと…
わしにも良からぬ影響が出るやもしれんのう…。」

ドロテア「ねえ、ペトラちゃん…
先生とエーデルガルドの様子少し変じゃない？」

ペトラ「変…、ですか？」

エーデルガルドが学級長を務める「黒鷲の学級」の生徒

「ドロテア」 かつて帝都の歌劇団の歌姫として活躍していた
黒鷲において唯一の平民出身の美女と

「ペトラ」フォドラ西方にある諸島を治める王の孫娘…
スレンダーながら豊満な乳房を持つ美女…

ペトラ「変、と言われてても、どのあたりが、変…でしょうか？」

まだフォドラの言葉に慣れておらず
ペトラの話し方はぎこちなさが目立つ

ドロテア「う～ん、うまく説明はできないんだけど…
一週間ぐらい前はすごく落ち込んでいたみたいだし、
今はピリピリした雰囲気をするのよ。」

ペトラ「ピリピリ、ですか？、よくわからないです…？」

ドロテア「イライラしている感じかしら…
ねえ、ベルちゃんも感じているわよね？」

ベルナデッタ「ひいっ…！？
なんですか、ドロテアさん…急に話しかけないでくださいっ！」

ドロテアに話しかけられて驚いたベルナデッタ
辛い家庭環境の影響により人付き合いが苦手で
恐怖すら感じるようになっており
他人と会話することすら苦痛に感じ
講義の時間以外は部屋に閉じこもっていることが多い

ドロテア「そ、そんなに驚かなくても…
とにかくベルちゃんも感じてるわよね？」

ベルナデッタ「はい…少し…エーデルガルドさんだけじゃなくて
ベレス先生もちょっと様子がおかしいですね。」

ペトラ「先生も、ピリピリ、してますか？」

ベル「ピリピリ…じゃないんですけど…
最近の先生って…ちょっと独り言が目立つなあと思って…。」

ベルナデッタたち生徒は知る由も無かったが
ベレスには彼女だけに感じ取れる「ソテイス」という存在がいる
彼女にとってはよき相談相手となっているが
事件以降…彼女と会話することが増えたために
生徒に目撃される機会が増えてしまった

ペトラ「たしかに見ます、先生、独り言、多いです！」

ドロテア「みんなも見てるんだ…
先生のために黙ってようと思ってたけど…
ちょっと心配になってきたわね。」

ベルナデッタ「でも…エーデルガルドさんのほうが気になりますよ…
今日も授業休んでいますし…。」

今までは一日たりとも
授業を欠席したことがなかったエーデルガルド
それが今週に入り二日連続の休みをとった

ペトラ「気になります、体の具合、悪いかもかもしれません。」

ドロテア「そうね…ここはみんなでお見舞いに行ってみましょうか？」

ベルナデッタ「えええええっ！？

私はまたの機会にしますっ！ 早く部屋に帰りたいので…。」

ペトラ「お見舞い、いいですね、みんなで行きましょう！」

ドロテア「決まりね！さあ、ベルナデッタ覚悟を決めていくわよ！」

ベルナデッタ「ひえええええっ、そんなあぁっ！？」

ドロテアとペトラに引きずられ連れ去られていくベルナデッタ

ペトラ「…部屋、いないみたいです…？」

ドロテア「体調が悪いのならマヌエラさんのところか…。」

ベルナデッタ「…別の用事の可能性もありますよね？」

部屋にエーデルガルドの姿はなく
お見舞いに来た3人は部屋の前で立ち尽くしていた

しかしその時…部屋の扉の隙間に置かれていた手紙に気付いた

ペトラ「手紙、置いてあります、開封されてます。」

ベルナデッタ「勝手に読んじゃダメですよお…！」

ドロテア「え〜と、なになに…
修道院東の宿にて待つ…って書いてあるわね。」

ベルナデッタ「何勝手に読んでもらうんですかぁ〜！？」

ドロテア「まあまあ、開封してこんな場所に置いといたら
いずれ誰かに見られちゃうわよ…だからこれは…。」

ドロテアはその手紙がそれ以上誰かの目に触れないよう
ドアの隙間からさらに奥へと押し込んだ

ベルナデッタ「あ〜あ、勝手に見たこと知られたら怒られますよ？」

ペトラ「それより気になります、エーデルガルド様、誰、会ってます？」

ドロテア「たしかに気になるわね…。」

ベルナデッタ「えっ…まさか…？」

ベルナデッタ「まさか本当に来てしまうとは…っ…。」

3人がやってきたのは手紙に指定されていた場所…

かなり薄汚れた宿…帝国の皇女が訪れるに相応しい場所とは思えない

もしや何かしら重要な機密情報をやりとりしているのでは…と
途端に不安になってくる3人…

ベルナデッタ「…知られたからには生かしてはおけない…
なんてことにならないですよね…？」

ドロテア「まさか…そんなこと…。」

エーデルガルド「……うっ…あぁっ……！？」

ペトラ「エーデルガルド様、いるですか!？」

ドロテア「こ…これはっ!？」

ベルナデッタ「えっ…!？」

3人が見つめる先にいたのは…



男の上に跨り下半身が繋がったエーデルガルドの姿…

極太の肉棒を受け入れ体を震わせるその姿を見た三人は言葉を失い
そのまま呆然と立ち尽くしてしまう

エーデルガルド「うっ、あああああ！！ イクッ！???」

3人の前で叫び大量の潮を噴き上げてしまったエーデルガルド
目を丸くしたままその様子を食い入るように見つめる3人

ドロテア「こういう…ことね…お邪魔しちゃったみたい…。」

ペトラ「エーデルガルド様も…、女、ですから…。」

ベルナデッタ「ベルは何も見ませんからっ！
誰にも言いませんから！！」

3人はエーデルガルドが己の性欲を満たすために、
極秘に男を相手にしているのだと思い込んだ

皇女という立場上、簡単に異性と交際することもできないはずだと…
どこか納得している様子だった

使者「おやおや…まさか他の生徒さんまで連れてきてしまうとは…
皇女様も罪なお方ですね…。」

エーデルガルド「まって…その3人には…手を出さないで！」

部屋の中から出てきた使者と…
慌てて彼を止めようとするエーデルガルト

ドロテア「あ、私たち…誰にも話したりしませんからあ…。」

ペトラ「私、口は、固いです！」

ベルナデッタ「ベルは何も見えてないし聞いていません！」

笑顔で自分たちは無関係だと言い張り
そのまま帰ろうとする3人だったが…

使者「……そういう訳にはいきませんよ。
予定より早いですが…問題ないでしょう、
君たちにも授業に参加してもらいましょうか。」

エーデルガルト「や、やめてっ……。」

ドロテア「きゃあっ!？」

ペトラ「な、なにをっ!？」

ベルナデッタ「いやあ、来ないでえっ!？」

合図と共に部屋へと押し入ってきた3人の男たち…
ドロテアたちは男たちに抵抗しようとするが…
不幸なことにいつもなら常に持ち歩いているはずの武器を
お見舞いに行くには相応しくないと置いてきてしまっていた

ドロテアは仕方なく得意の魔法で男たちを撃退しようとするが…

ドロテア「な…なんで…魔法が発動しないっ!？」

使者「当然ですよ、
この建物自体が結界の役割を果たしておりますので…
ここでは一切の魔法は使えません。」

ドロテア「そんなんっ!？」

ペトラ「くっ、離しなさいっ!？」

ベルナデッタ「ああああっ、やめてえっ!？」

3人へと襲い掛かった男たちは…只者では無かった…
士官学校で鍛えられているとはいえ…3人は実力不足

すぐに男たちに拘束されそれぞれ別の部屋へと連れ去られてしまう

ベルナデッタ「いやああっ、助けてくださいっ!？」

ペトラ「ベルナデッタ、きっと、助けるです!」

ドロテア「きゃあっ、変なところ触らないでっ!？」

ペトラとベルナデッタは…地下室へと連れてこられた

ペトラ「ドロテアは、彼女は、どこ！？」

怒りに満ちた表情を浮かべるペトラと

ベルナデッタ「ふええええっ、ベルをどうする気ですかあっ！？」

ただ泣きじゃくり叫ぶベルナデッタ…

使者「ドロテアさんはちょっと…会いたいという方がおりましてね…。」

ドロテアは別の部屋へと連れていかれたらしい…

ペトラはベルと共に部屋から逃げ出そうとするが…

ペトラ「ベルナデッタ！？ しっかり、逃げます！？」

ベルナデッタ「だ…だめです…っ！腰が抜けて…！？」

恐怖から完全に腰が抜け立ち上がることができないベル

ペトラは自分だけで逃げることはできなかった

使者「さて…

皆さんには少し早いですが特別授業を受けて頂きましょう…

その授業とは…

敵の捕虜になりどんな凌辱を受けて決してくじけない

強い心を育てる訓練…です。」

ベルナデッタ「ひいいいいっ!？」

ペトラ「あの…、よくわかりません、…どういう、意味？」

フォドラ語を十分に理解していないペトラは
早口な使者の言葉を完全に理解できていないようだった

使者「…お二人にはここで男たちに犯されてもらいます…。」

ペトラ「えっ!？、なぜ、そんなことっ!？」

使者「もう十分ですね…さあ、はじめなさい！」

ベルナデッタ「いやあああっ!？触らないでっ!？」

ペトラ「ベルナデッタ!？、だめ、そこは…お尻!？」

男たちに背後から抱き着かれ体を撫でまわされる二人…

ペトラ「うっ…あああああっ!？」

ベルナデッタ「ひっ…あああああっ!？」

スカートの中に手が潜り込み…下着の上から秘部を激しく愛撫する…

こういった行為に疎い二人はその指使いに体が敏感に反応し
体をビクビクと震わせ素直な反応を見せていた

ベルナデッタ「あっ…あああっ…体がっ…どうして…？」

ペトラ「こんな…、おかしいです…、体が、言う事を聞きません!？」

二人は気付いていないが、
男たちの指にはベレスに盛られたものと同様の
媚薬効果のある魔法役が塗られていた…
秘部を愛撫されたことで媚薬が効果を発揮し
二人の体は想像以上に感度が高まり…熱くなっていく

ペトラ「はあ…はあ…、うっ…あああああっ!？」

ベルナデッタ「ふあああああああっ!？」

下着を脱がされ秘部が露わになっても二人は動揺しない…
する余裕すらない

膣内を指でかき回され頭の中が真っ白になり
いつの間にか激しい快楽に身を任せ大量の潮を噴き上げていた

ペトラ「あっ…ああ…あっ…。」

ベルナデッタ「あうっ…うああっ…!？」

既にぐったりとした様子で動けずにいる二人…

ペトラ「ああ…、だめ…、こんなこと…!」

ペトラの両足を広げ反り立った肉棒を秘部へと押し当てる男
自分でも驚くほどに抵抗する気力が湧かず…
男の肉棒をじっと見つめたまま受け入れてしまう

ペトラ「うっ!？ うあああああああっ!？」

肉棒の根元まで一気にペトラの膣内に挿入されていった



ベルナデッタは男に抱え上げられすぐ横のベッドの上へと寝かされる

ベルナデッタ「ああああ…ダメです、ベルはまだ…処女なんですっ！」

片足を抱え上げられ背後から肉棒を押し当てられると
ベルナデッタは大きく体を反らし必死に逃げようとしていた
薬の効果は十分に出ているが、
それでも本能的に恐怖を感じたのだろうか…

しかし…

ベルナデッタ「ひやああああああっ!？」

それ以上の抵抗はできず、肉棒はあっさりと膣内へと挿入されていった



ベルナデッタ「うっ…ああああ、っ!？」

小振りな乳房を大きく揺らし激しい勢いで
背後から突かれるベルナデッタ

はじめて極太の肉棒を挿入されたのにも関わらず…
ベルナデッタとペトラの体は驚くほど素直に肉棒を受け入れていた
僅かに感じる苦痛は圧倒的な快感の前にかき消され
二人は想像を超えた快感を前に混乱していた

ペトラ「ああああっ!？　なんでこんな、気持ちいい、です!？」

ベルナデッタ「あああああっ、気持ちいいよおっ!
はじめてなのに…処女なのにいいっ!？」

冷静に判断することもできずただ快感に
身を任せることしかできなかった…

そして快楽に身を任せてしまうと…気持ちがより高ぶり
膣内で動く肉棒の与える刺激に夢中になっていった

そして…

二人の肉体は快楽に完全に敗北し大量の潮を噴き上げ
男たちの熱い精液を受け入れてしまった

ペトラ「あああああああああっ!？」

ベルナデッタ「ひあああああああっ!？」



ドクドクと射精される精液が膣内に溢れていく...

呆然としながらもその感覚に夢中になり
見知らぬ男とのセックスに魅了されてしまった二人...



ベルナデッタ「ああ…もう一回、気持ちよくして…。」

ペトラ「私も…、お願い、します…。」

差し出された男の肉棒に夢中でしゃぶりつく二人…
必死にセックスを求めるその姿をじっと観察していた使者は…

使者「この薬は少々強すぎますね…
このままではただの淫乱な娘になってしまいます…
それはそれで利用価値はありますが…。
次の学級は少し趣向を変えた授業に取り組んでみましましょうか。」

・同時刻 ドロテア

ドロテア「一体…私をどうするつもり…!？」

個室へと連れ込まれたドロテア…
両腕を鎖で繋がれ自由を奪われていた

太った幹部「ほう…本当に「あのドロテア」だとは…。」

ドロテア「だ…誰なのっ!？」

ドロテアの前に現れたのは教団のローブを纏った男

太った幹部「わしを覚えておらんのか？
あれほどお前の劇に足繁く通ったというのに覚えておらんとは…
どれだけ高価な贈り物をしたのかも覚えておらんようだな…？」

ドロテア「……………」

必死に思い出そうとしたドロテアだったが…何も思い出せなかった
このような恰幅の良い貴族が
何百人もファンとしてドロテアの劇に通い詰めていたからである

劇場にも教団のローブで来ていれば
少しは印象に残ったかもしれないが…
そんな目立つローブを纏ってくる客などいるはずもない

太った幹部「なんと…あれだけ応援していたというのに…
ワシのことを全く覚えておらんだとっ!？」

ドロテア「そ…そういわれましても…。」

太った幹部「おのれ…
こうなったらワシの事を二度と忘れないように…
その身にワシのすばらしさを教え込んでやる!!」

ドロテア「えっ!？ すばらしさって…きゃああああっ!？」

ドロテアの目の前で男は服を脱ぎ捨て全裸となると
そのままドロテアの体へと抱きつき服を脱がし始める

ドロテア「い、いやっ…やめっ…うっ!？」

服を脱がされながら男に強引に口づけされる

必死に逃げようとするが男は口をとがらせ執拗にドロテアの
唇へと重ねてくる…
悪臭漂う舌がドロテアの口内へと入り込みかき回す

ドロテア「あっ、あああっ! いや、やめてえっ!？」

完全に冷静さを失い怒りに満ちた表情を浮かべるドロテア
しかし、彼女は自分がいつの間にか服を脱がされ
下着のだけの姿になっていることに気付くと…
途端に顔を真っ赤に染めて悲鳴を上げた

ドロテア「きゃああああっ!？」

太った幹部「おお、素晴らしい体だ…
劇場で見た時より一層成長しておるのうっ!」

豊満な乳房を大きく揺らしながら必死に鎖を外そうとするドロテア
だが、その手枷にも特殊な魔方陣が刻まれており
力づくでは決して逃れることができない

太った幹部「さあ、ワシの愛を受け入れておくれ…！！」

ドロテア「いやあ、やめてええ！！！」

太った幹部「ほう…なかなか毛深いではないか…たまらんのう！」

男に足を抱えられ強引に肉棒を秘部へと押し当てられる
必死に抵抗し男の股間を蹴り上げてやろうかと思ったドロテアだが
不思議なことに力を込めようとすると手枷に不思議な力が流れ
全身から力が抜けていく…

抵抗することもできず…

彼女の目の前で男の肉棒がゆっくりと挿入されていった



ドロテア「いやあああああっ！！！！??」

ドロテアの膣内を肉棒が貫いていった…
激しい苦痛に顔を歪め涙があふれる…
男は憧れの歌姫を我が物にしたとばかりに
激しく腰を振り喜びを表現していた

ドロテア「ああああ、痛いっ！ やめてっ！！」

太った幹部「何を言う！ワシの愛がわからんのか！？
心配するなお前もワシらの子もしっかりと面倒見てやろう！！」

ドロテア「何言ってるのよっ！！ うっああああっ！？」

激しい腰使いでドロテアを揺さぶる男…
なぜこんなことになっているのか…何も解らない状況で
ただ犯されるドロテア

ドロテア「あああっああ、こんなこと…！？ なんでっ！？」

ドロテアは決して口にはしなかったが
これが初めての経験であった

それを口にしてもただ男を喜ばせるだけだと…必死に耐え続け
早くこの苦痛が終わることだけを望んだ

太った幹部「おお、限界じゃ…ドロテア中に出すぞっ！！」

ドロテア「いやっ、お願いそれだけはっ！！」

必死に逃げようとするドロテアの腰をがっしりと抱え込む男

そして…

ドロテア「ああああああっ！！??」



男の精液がドロテアの膣内に溢れていった…

ドロテア「あっ…あがっ…ああ…そんなっ…。」

顔を真っ青にし絶望の表情を浮かべるドロテア

太った幹部「想像以上に素晴らしかったぞ…さて…

これから本格的に特別授業が始まるが…

そうじゃ！ドロテアはワシが直々に授業を行う事としよう！」

ドロテア「い、いや…先生助けて…っ…。」

士官学校の女神たち

2章

官学校に3つある学級の1つ

「金鹿」の学級

諸侯同盟出身者達が集められた
他の学級よりも平民出身の者が多いという

学級長の「クロード」は
諸侯同盟の盟主の嫡子であり次期盟主の立場となっているが
人懐こい笑顔と砕けた態度で貴族らしさはなく
彼の性格を受けてか3つの学級の中で金鹿の学級が
最もほのぼのとしている

そんな金鹿の学級に…特別授業の実施が伝えられた

ヒルダ「特別授業？
なにそれ、はじめて聞いたんですけど…？」

リシテア「私も初めて耳にしますね、
一体どんな授業内容なのか興味があります。」

マリアンヌ「あの、あまり危険な授業じゃないといいんですが…。」

同盟公爵家の令嬢「ヒルダ」

甘やかされて育ったこともあり、
怠け癖があり甘え上手な貴族のお嬢様であり
金鹿のムードメーカーでもある

公爵家の長女、「リシテア」

今年入学した学生の中で最年少の少女
小振りで子ども扱いされることが多い天才肌の美少女

辺境伯の養女「マリアンヌ」

口数が少なく他人を避けることが多いが
動物への愛着が強く自分から進んで世話係を買って出るほど
ときおり世話する馬に語り掛けていることもあり
他人から白い目で見られている

ベレス「危険…かもしれないけど、
不参加は許されないと言われているわ。」

ヒルダ「強制参加ってことですかあ…？
レオニーがいないんですけど？」

リシテア「彼女はジェラルドさんのところに行くと言っていました、
きっと訓練でもしているのでしょうか。」

ヒルダ「うっ、自分から進んで訓練に参加するなんて…
信じられない。」

マリアンヌ「それで…先生、特別授業の内容は…
どういったものでしょうか？」

ベレス「…動物の世話だと聞いているわ。」

ヒルダ「動物の世話っ！？なにか…恐ろしい魔獣とか…？」

ベレス「馬…ペガサスだと聞いてるけどそれ以上はわからないわ。」

動物の世話と聞き目を丸くして驚く3人…
貴族たちにとって動物の世話は使用人のすることであり
関わることは基本ないが
騎兵として愛馬の世話をする者は多いので
馬やペガサス、騎竜の世話ならば特別というほどではない

マリアンヌ「あまり特別という印象はありませんが…
動物たちの世話であれば私は大丈夫です。」

動物好きなマリアンヌは若干テンションが上がっているのか
話し方に勢いが出てきた

リシテア「まあ…いずれ馬に乗るクラスに
就く可能性もありますしね…私は問題ありません。」

ヒルダ「はあ、面倒だけど仕方ないか…わかりました、やります！」

ただの動物の世話というものが特別授業として
扱われていることに疑問を持った3人であったが

ベレスからの話しという事もあり
それ以上の疑問を持つことなく従った

マリアンヌ「…修道院の馬屋では無いのですね。」

ベレスの後に続く3人、
次第に修道院から離れていく

マリアンヌは修道院の馬屋にいる
よく知っている馬の世話をするのかと思い込んでいたらしく
すこしガッカリした様子だった

ヒルダ「ねえ、先生…どこまでいくつもりなの？」

ベレス「もう着くわよ…ほら…。」

リシテア「…こんなところに村がありましたっけ？」

修道院からもほど近い場所にある小さな村…
ベレスたちが級長たちと出会った村よりもさらに小さい
生徒達の記憶にも残らないほど存在感の無い村であった

ヒルダ「ずいぶんとボロボロだけど…誰か住んでいるの？」

マリアンヌ「ずいぶん放置されていたように見えますね…。」

リシテア「ここで特別授業をすることに
どんな意味があるんでしょうか？」

村の様子を見た3人はかなり警戒している様子だった

しかし…そんな3人の前でベレスは…

ベレス「さあ、こっち…この奥に。」

ベレスはゆっくりと足を進め馬屋の中へと入っていった
顔を見合わせ戸惑う3人だったが、仕方なく
ベレスの後を追って馬屋の中へと足を踏み入れた

ベレス「この馬と…ペガサスの面倒を見てもらうわ。」

そこには一頭の馬と…ペガサスの姿があった

しかし…

動物好きであるはずのマリアンヌも
その2頭を見て眉間にしわを寄せた

馬とペガサスはベレスの体へと舌を伸ばし
乳房や太股をいやらしく舐め回していたのだ

マリアンヌ「せ、せんせい…！？」

ヒルダ「ちょっと先生っ！おっばい舐められてるっ！？」

ベレス「ええ、いつもこう…。」

リシテア「なんでこんな時でも冷静なんですか…っ！？」

3人は顔を真っ赤に染め馬に体を舐められるベレスを見つめる

ベレス「みんなもすぐ慣れるわ、…ほら…こうやって…世話するのよ。」

ベレスは3人の目の前で馬の勃起した肉棒へと手を伸ばし…
口元へと引き寄せると舌を伸ばしてしゃぶりだした

その光景に圧倒され言葉さえも出てこない3人

ベレスが馬の肉棒をフェラする
激しい音だけが馬屋の中に響いていた…

ベレス「…はあ…はあ…さあ、やってみて？」

ヒルダ「…できるわけないでしょっ!？」

リシテア「一体どうしちゃったんですか先生…
なんだか別人みたいっ…？」

戸惑い混乱するヒルダとリシテア…
そんな真似できるわけがないと、拒否するが

マリアンヌ「……………」

マリアンヌは顔を真っ赤に染め肉棒をしごく
ベレスの様子をじっくりと見ていた

マリアンヌ「こ…こんな動物の世話があるなんて…、
はじめて知りました…。」

ヒルダ「何感動してんのよっ!？」

リシテア「先生の様子は少しおかしいです！
修道院へと戻って報告する必要があります！」

ヒルダ「少しどころじゃないわ！もう…何がなんだか…、
ほら、マリアンヌも…急いで戻るわよ？」

ベレス「ほら、マリアンヌはそっちのペガサスで…試してみてください。」

マリアンヌ「えっ…は、はい…!？」

ベレスに促されそれに従いペガサスへと近づくマリアンヌ

そんな彼女をヒルダとリシテアは強引に連れ帰ろうとするが…

マリアンヌは動物の世話に興味を引かれているらしく
動こうとはしなかった

ヒルダ「とりあえず…私たちだけでも戻って…。」

リシテア「ええ…誰かに相談しないと！」

馬屋を飛び出し修道院へと駆け出していく二人…

ベレス「あの二人は後でちゃんと授業を受けてもらうわ…
さあ、マリアンヌ…やってみて？」

マリアンヌ「あの、先生はいつも…
こんなことをされているのでしょうか？」

ベレス「ええ、最近は…毎日…エーデルガルトも一緒に。」

マリアンヌ「エーデルガルト様も…！？」

その言葉に驚きを隠せないマリアンヌ

ベレスはマリアンヌの真横で馬の肉棒を激しくしゃぶっている
マリアンヌはその様子をじっと観察すると…
ゆっくりとペガサスの肉棒へと手を伸ばし…
ベレスを真似て舌を這わせていった

マリアンヌ「んっ…すごい…大きくて、変な味がします。」

最初は戸惑いながら舌を這わせていたマリアンヌだったが
ベレスに合わせるように次第に舌使いを激しくさせていく

溢れ出てくる馬の愛液に戸惑いながらも
じっくりと味わっていく…

ベレス「…さすがマリアンヌ、扱いがうまいわ。」

マリアンヌ「そ、そうでしょうか…。」

褒められ少し恥ずかしそうな表情を浮かべる

ベレス「それじゃ、次の段階に進むわ…あなたなら大丈夫。」

マリアンヌ「は、はいっ！お願いします…。」

ベレスはマリアンヌによく見えるように…
馬の下へと潜り込んでいった

そして…馬の肉棒を自分で手繰り寄せ…
秘部へとぐっと押し当てると

ベレス「あっ…入ってきたっ…。」

ゆっくりと肉棒を挿入させていった

馬はこの時を待ち望んでいたかのように興奮し激しく腰を振り始め
ベレスの体を大きくゆさぶり交尾を開始したのだった

ベレス「あっ…ああああああっ！？」

マリアンヌ「先生、…これはっ…。」

さすがのマリアンヌもこの光景には戸惑ってしまっていた

動物好きとはいえ自らの処女までも捧げることには抵抗があった

ベレス「…さあ、マリアンヌ…あなたも…。」

マリアンヌ「いえ、先生…さすがにこれは私も…。
きゃあ、何ですかっ!？」

完全に腰が引けてしまっているマリアンヌだったが
背後から現れた数人の男たちがマリアンヌの体を抱え上げ
強引にペガサスの下へと押し込んだ…
男にスカートが捲られ下着を下ろされると
白い美しい肌をした美尻が露わになる

マリアンヌ「待って、先生！ 私まだ心の準備がっ…!!」

ベレス「大丈夫よ…私も最初はちょっと痛かったけど
すぐに気持ちよくなれたの。」

ベレスは馬の元を離れてマリアンヌの元へと歩み寄り

ペガサスの肉棒を手に取りゆっくりと
マリアンヌの秘部へと密着させた

マリアンヌ「ひあああああっ!？」

ベレス「もうぐっしより濡れてるわね…私を見て興奮したの？」

マリアンヌ「それは…あああ、だめ…中に入ってきてますっ!」

膣内へとゆっくりとペガサスの肉棒を押し込んでいくベレス

マリアンヌは顔を歪めて泣き叫び体を小刻みに震わせていた



押し込まれた肉棒はじわじわと膣内の奥へと侵入し
マリアンヌの子宮を強く押し上げる

マリアンヌ「あはっ!?! ああああああつ!?!」

体とビクンと反応させると
隠されていた豊満な乳房が大きく揺れ動く

ペガサスもマリアンヌの体を気に入ったらしく
リズムよく腰を振り始め交尾を開始した

マリアンヌ「あああ、先生っ…
わたしペガサスと…交尾していますっ…！？？」

ペガサスはマリアンヌが最も愛する動物のひとつ
幼い頃からペガサスの育成を見てきたマリアンヌは
特に思い入れがある

だが、ペガサスと交尾することになるなど想像もできなかった
今まで大切にしてきた動物たちへの感情が大きく揺れ動く

マリアンヌ「お、奥まで入って…すごいですっ…！？」

初めてはずだが頭の中で様々な感情が入交り
本来感じるはずの苦痛さえ感じる余裕もなく
愛する動物と交尾しているという現実にはショックを受けていた

しかし

…

マリアンヌ「あはああああんっ！すごいつ激しいっ！
気持ちいいっ…！？」

快楽を感じ始めると…
マリアンヌは普段の様子とはまるで変り
自ら腰をくねらせペガサスとの交尾を楽しみ始めた

快楽でよりペガサスという動物へと愛情は高まり
交尾を楽しむ余裕が出てきていた

マリアンヌ「あああ、だめ…イクっ！？」

悲鳴と共に大量の潮を吹いたマリアンヌ

同時に大量の精液を射精するペガサス…

マリアンヌの声とペガサスの鳴き声が重なり合い
馬屋の中で木霊する

マリアンヌ「あああああああああっ!？」



大量の精液を受け入れたマリアンヌの腹部は
ぷっくりと膨れ上がっていく

マリアンヌ「あああ、ペガサスの精液が…私の中に…っ…。」

うっとりとした表情を浮かべたまま体をビクビクと震わせる

ベレス「…すごく気持ちよさそうね、私も…続きを…。」

マリアンヌの姿を見て気持ちが高ぶったベレスは
交尾途中で放り出され興奮している馬の下へと再び潜り込み
馬との交尾を再開した…

ベレス「あっ、あぐっ！？ そんなに、激しくしないでえっ！」

使者「ふう、先生にも困ったものですね…
しっかりと役割を果たしてもらわないと…。」

逃げ出したヒルダとリシテアを見つめる男…

使者「ですが大丈夫…これも想定のうちです、さあ、行きなさい！」

使者の合図と共に大小二つの影が走り出し二人の後を追う…

ヒルダ「はあ、はあ、一体先生どうしちゃったの？」

リシテア「…ふう、先生の様子はいつもと違いました…
もしかしたら何者かに利用されているのかも…。」

ヒルダ「そうよね…、
あの先生があんなこと生徒にさせるわけないわね。」

ベレスの卑猥な行為をする姿を見ても、
二人のベレスへの評価は変わらなかった
今までの生徒と教師としての関係から
ベレスが何者かに脅迫されたか…
洗脳されているのではないかと考えていた

ヒルダ「とにかくレア様にも報告しないと、
もしかしたら教会のほうを狙いかもしれない。」

リシテア「可能性はありますね…ただ……っ…
ヒルダ、何か近づいてきます…。」

ヒルダ「えっ…なに、あれっ!？」

ヒルダとリシテアが見つめる先、
森の木々が大きく揺れ、次第に大きな足音のように振動が響いてくる

リシテア「ひっっ…あれは…?。」

ヒルダ「あれは…犬…?」

森の中からひょっこりと姿を現したのは…一匹の犬
そしてその背後から…巨大な体をした魔獣が姿を現した

犬の姿に油断し安堵していた二人は大きく驚き悲鳴を上げた

そして一目散に走り出しその場から逃げ出した

ヒルダ「なんなのよあれっ！？」

リシテア「知りませんよっ！？なぜ魔獣がこんなところに！？」

必死に修道院へと向かい走り続ける二人…
だがそんな二人を追いかける大小二つの影…

リシテア「ヒルダ、追ってきてます！！」

ヒルダ「え、なんで私にっ！？」

ヒルダのあとを追いかけるのは…一匹の犬
しかし犬とはいえ鍛えられた大型の軍用犬のように見える
油断すれば食い殺される危険がある…が勝てない相手ではない

ヒルダは武器を手に取り戦う決意をする…が

ヒルダ「きゃあああああっ、なんでえっ！？」

犬の速さのほうが高く、武器を構える前に飛びつかれてしまった

リシテア「ヒルダっ！？」

ヒルダ「ひいいっ、リシテア…あなたのほうに魔獣がっ！」

リシテア「えっ…そんなっ！？」

犬に背後から抱き着かれ抜け出せないヒルダ
リシテアには魔獣が迫り、ヒルダを助けに行くことができない

リシテア「ひいいいっ!？」

必死に魔法を唱え連続で魔獣へと撃ち込む…が
魔獣は平然とリシテアへと襲い掛かり
鋭い牙で彼女のスカートを引き裂いた

リシテア「きゃああああっ!？」

真っ白な肌と下着が露わになり咄嗟に隠そうとするが
その際に魔獣はリシテアの上へと覆いかぶさり逃げ道を塞ぐ

ヒルダ「リシテアっ!？
ちょっと、この犬っ!どきなさいよっ!？
…って、ちょっと何してるの…これって…!？」

ヒルダの体に密着し激しく腰を振り始めた犬…
その頭部からは小さな角が生えており正確には
犬に見える「小さな魔獣」であったが今のヒルダにはどうでもよかった

ヒルダ「いやあああ、うそっ…わたしと…交尾しようとしてるっ!？」

犬魔獣の目的を理解してしまったヒルダの顔は青ざめた
不幸にも普段から短いスカートで行動しているヒルダ
犬の激しい腰使いでスカートは捲れ上がり
下着の上から犬魔獣の肉棒が秘部に擦り付けられる

ヒルダ「ひああああっ!？」

思わず悲鳴を上げてしまったヒルダ
今まで秘部を他の誰かに弄ばれた経験など無く
肉棒が擦り付けられただけで激しい刺激が走る

ヒルダ「あああっ、いやあっ!?! うそっ!?!
下着が…ずれて…ああっあ、当たってるっ!?!
ダメ…そんな動かないでえっ!!!」

下着がずれ犬魔獣の肉棒が秘部へと直に密着し…
膣内へと挿入していく

ヒルダ「いやあああっ!?!?!」

必死に叫ぶヒルダだったが既に手遅れ
一度交尾が始まれば…犬魔獣はただ本能に従うだけだった



ヒルダ「だめっ…そんな激しくしないでえっ!？」

犬魔獣の激しい腰使いに悶えるヒルダ
彼女もこれが初めての経験であったが
犬魔獣の肉棒はすっぽりと根元まで入り込み
ヒルダの秘部からは大量の愛液が溢れていた…

リシテア「いやああっ、来ないでくださいっ!？」

必死に魔獣から逃げようとしていたリシテアの元にも
巨大な肉棒が迫りつつあった

リシテアはそれが最初、何であるか理解できなかった
ただ巨大な長い塊…それ以外なにも浮かばなかった

だが…

リシテア「ひいっ!??？」

その肉の棒が秘部へと押し当てられると…
ようやく自分の置かれている状況を理解してしまった

リシテア「そんなっ、私のっ…中にっ…!?
いやああっ、入ってきてるううっ!??？」

既に手遅れだった
肉棒はリシテアの膣内をぐいぐいと押し広げ侵入を開始していた



きやあああああつ!!
魔獣の…太いのが…入ってきてるっ!!
いや、奥にまでっ…ああああああつ!!

ズズズズ

リシテア「あああああつ、お腹があああつ!？」

極太の肉棒が挿入され子宮を押し上げる
激しい苦痛を感じ全身で必死に耐える…
泣き叫ぶリシテアだが助けなど来ない…

ただ二人の様子を森の中から観察している数人の男たちがいた
魔獣を用意した男たち…彼らは実験材料を見つめるかのような
冷たい瞳で犯されるヒルダとリシテアの姿を見つめていた

ヒルダ「ああああああああっ!？」

犬魔獣の激しい攻めに大量の潮を噴き上げたヒルダ

ヒルダ「あああ、もう、ダメ…これ以上イキたくないっ…!？」

人間との交尾に特化して改良された魔獣が相手では
初めてのヒルダには相手が悪すぎた

犬魔獣に弄ばれるように何度もイカされ続け
既に意識が朦朧としている様子だった

ヒルダ「うっ、あああああっ!？
うそっ…いやだ、中には…出さないでえ!!」

犬魔獣の動きがより激しくなり息遣いが荒くなる
そして体をビクビクと震わせると
ヒルダの膣内で射精したのであった



うあああっ…!!
私…犬にイカされちゃった…
ああっダメ…気持ちよすぎてっ…
おかしくなりそう…!?

ヒルダ「ひあああああっ!!??」

全身を痙攣させ悶えるヒルダ
腹部を膨らませるほど大量の精液が溢れ
ヒルダは激しい快樂に意識を失ってしまった

リシテア「ひあああああっ!？」

極太の肉棒で攻められ続けていたリシテアも限界であった
普通の人間には耐え切れないほどの苦痛のはずなのに
激しい痛みは消え今では快感しか感じられなくなった

幼い頃受けた実験の影響か…

リシテアの肉体は普通の人間を凌駕した一面を持っていた

リシテア「ああああ、もう…ダメエエっ!!!!??
なんでこんなに気持ちいのおっ!??」

リシテアの理性は崩壊寸前であった

こんな魔獣相手に興奮し快感を感じている自分が信じられなかった
だが、そんな苦悩も忘れさせるほどの快楽が続き…

リシテア「あああああああっ!？」



膣内に大量の精液が射精されると同時に潮を噴き上げた

白目を向きガクガクと快楽に震えるリシテア

リシテア「あああ…すごいです…こんな世界があったなんて…。」

今まで自分が知らなかった境地に達し感動すら覚える

魔獣たちはまだ彼女たちを解放することなく…
さらに交尾を続ける…

使者「まさかここであの実験体に遭遇するとは…
おかげでいい比較対象になりましたし、結果も上々ですね…。
さて…つぎは青獅子ですか…楽しみですね。」

士官学校の女神たち

3章

ソティス「愚か者めっ！馬相手に何をしておる！？」

ベレス「…ごめんなさい…。」

士官学校にある自室でソティスから叱られるベレス

快楽に浸り性欲に溺れているベレスの姿を
ソティスは彼女の中からずっと見つめていた

人間相手なら理解できなくもないが…

馬相手に興奮しているベレスの姿にはさすがに我慢ができなかった

ソティス「お主、あの後ペガサスともしたであろう！
相手は誰でも良いのか？ どれだけ性欲が強いんじゃっ！？」

ベレス「誰でも…と言われると困る。
私もよくわからない…。」

感情を表に出さないベレス、
自分の年齢すらわからない彼女にとって
恋愛というものは無縁であった
士官学校に来て初めてセックスという快感に気づかされ
いつの間にか病み付きになり…
今では一部の大人しい生徒にすら手をだしつつある

ベレス「……。」

ソティス「ベレス！お主、今またいやらしい事を妄想しておったなっ！？
毎回、目の前で見せつけられるワシの身にもなれ！？」

ベレス「ソティスも興味がある…？」

ソティス「な、何を言い出すのじゃあっ！」

顔を真っ赤に染め息が荒くなるソティス

ベレス「…こうなったのは…あの男たちがきっかけだったわ。」

ソティス「あ、ああ…そうじゃったな
あの男たちが何か良からぬことを企んでいることは間違いない…、
ベレスよ、お主もおそらく年頃の娘なのじゃろう
少しくらいは快樂を楽しんでも良いが、油断はするな
奴らを常に警戒するのじゃぞ！」

ベレス「ええ、わかってる。」

イングリット「やっぱり先生ひとりで話してます…。」

メルセデス「噂は本当だったのねえ…。」

ベレスの部屋を窓から覗き込んでいるのは…

青獅子の学級

イングリットとメルセデスの二人だった

イングリットは
騎士を志す伯爵家の息女
非常に生真面目であるが美味しい物には目が無い一面を持つ

メルセデス
元は帝国貴族だったが今は平民として王国に暮らす
困っている人を放っておくことができない性格だが
非常におっとりとした性格をしている
生徒の中では最年長らしい

最近、士官学校内でベレスや
エーデルガルトに対する噂が広がっている

ベレスは最近、女として魅力的になり
男子生徒の注目の的となっている…
自室で独りごとをつぶやいているという噂は…
実は恋人がいて自室で共に過ごしているのではないか…
などと尾ひれがついている

エーデルガルトは最近年上の異性と行動する場面を
よく目撃されており、
次期皇帝として未来の夫を探しているのでは…と噂されている…

ベレスを教師として非常に慕っているイングリットは
メルセデスと共に、
それが間違いであることを確かめるために部屋を覗きにきていた

イングリット「よかった…先生一人みたい…
やはりつまらない噂だったのよ、
先生は独り言がちよっと大きいだけ。」

メルセデス「そうね～、安心したわ。
でも、もうちょっと抑えたほうがいいわよね～。」

安堵する二人の元に…

ベレス「ああ、ちょうどよかった。」

イングリット「うあっ！？ 先生っ！？」

メルセデス「さすが先生、全然気づきませんでした～。」

突然、部屋の中にいたはずのベレスが現れる

ベレス「今日の特別訓練は君たちに参加してもらおうから…準備しておいて。」

イングリット「特別訓練ですか？」

メルセデス「どんな訓練になるんでしょうか〜？」

ベレス「王国と帝国の国境付近に潜む山賊退治と聞いているわ、規模は小さな山賊団らしいから。」

イングリット「私たちと先生だけで山賊討伐ですか…。」

ベレス「山賊被害が帝国にも及んでいるらしいから、エーデルガルトも同行することになってる。」

メルセデス「エーデルガルトさんも…
楽しい訓練になりそうですね〜。」

目的地は帝国と王国との国境付近…
修道院からもそこまで遠くなく、
馬を使えば数時間で到着する距離にあった

学級が違うとはいえ生徒同士…
楽しい道中になるかと思っていたメルセデス達であったが

ベレスは口数が少なく、エーデルガルトもあまり多くは語らない…

何より…二人の様子はメルセデス達から見てもおかしかった

エーデルガルト「はあ…はあ…。」

ベレス「うっ…あっ…。」

不思議な程に息を荒くし頬を赤く染める二人

体調が悪いのでは…と声をかけるメルセデスであったが
二人は治療を拒否した…
原因は別のところにあるからだ

特別授業が開始されて以降…
エーデルガルトとベレスは
毎日のように男たちに抱かれる日々を送っている…

闇に蠢く者たちと教会の幹部たちはあらゆる手段で
二人を利用しようと男たちを送り込んでくる
媚薬を盛られ性欲の抑えきれなくなった二人は
すんなりと男たちを受け入れ…時には一晩中抱かれることもある

そして休日には教会幹部の男たちに体を弄ばれる…
最近はそんな毎日を過ごしているのだ

しかも…今彼女たちの下着の中には…
闇に蠢く者たちが開発したという特殊な魔道具が仕込まれており
それが激しく秘部を刺激し続けている

エーデルガルト「うっ…ううっ…!？」

ベレス「うああっ!？」

二人の下着は既にぐっしよりと濡れていた…
心配するメルセデスとイングリットには申し訳なかったが
二人に気付かれる訳にはいかない…
ベレスとエーデルガルトは必死に快楽に耐え目的地へと急いだ…

イングリット「ここが目的地の町ですね。」

メルセデス「大きくは無いけど素敵な町ですね〜。」

国境に近く、帝国と王国双方の文化が入り混じった建物が目立つ町、

既にセイロス騎士団が到着しており
学生たちは山賊退治の仕上げを任されることになっている

騎士「ベレス先生ですね、
ご苦労様です…山賊達の詳細についてですが…。」

ベレス「……ええ…。」

エーデルガルト「うっ…!？」

町の大通りで騎士から山賊たちに関する情報を伝えられる…
小さな町とはいえ大勢の人が行き交う通り…
士官学校から来た美人教師と美女生徒達に自然と人々の視線が集まる

その瞬間に…秘部を刺激していた魔道具がより激しく振動し始めた

ベレスとエーデルガルトは、
闇に蠢く者たちが近くに潜んでいる事をすぐに察した
人々の前で魔道具の出力を上げ、
快感に耐える自分たちを見て楽しんでいるに違いなかった

老人から子供まで…大勢の視線が集まる
そんな中、溢れ出た愛液がベレスと
エーデルガルトの太股を伝い流れ落ちていく…

エーデルガルト「……………!？」

思わず力が抜けベレスへと寄りかかってしまうエーデルガルト…
だが体を触れられたベレスは…

ベレス「うっ…!??？」

パンツを身に着けたまま大勢の前で潮を吹いてしまった
思わず身をかがめ、そのままうずくまってしまう

メルセデス「先生っ！やはり少し具合が悪いのでは～？」

イングリット「どこか部屋を借りられますか？
少し休ませてください。」

騎士「は、はい！すぐにご用意いたします！」

イングリット「先生たち大丈夫かしら…？」

メルセデス「ライブはかけておいたけど…
体の疲労ではないみたい、精神的なものかしら～？」

イングリット「先生忙しそうですものね…
独り言が多くなるのも無理ありません…。」

メルセデス「そうよね～。」

ベレス「はあ…はあ…っ！？」

エーデルガルト「うっ…ああ、先生っ！？」

用意された個室のベッドの上で…
激しく互いの秘部を舐め合うベレスとエーデルガルト

特別授業がはじめて以降・・・
高まった性欲を抑えるために・・・
時折互いの体を慰め合うことがある
これは闇に蠢く者たちや教会幹部の男たちに
利用されないために、送られてくる男たちに屈しないために
エーデルガルトより提案された

互いにそれを十分理解し、
決して望んでやっていることではないはずだったが・・・

エーデルガルト「ああ・・・先生・・・。」

ベレス「・・・うん・・・。」

二人はどこか楽しんでいるようにも見える

ベレス「でわ、これより山賊の潜む洞窟へと向かう。」

エーデルガルト「わかりました。」

性欲を処理した為、不自然なほどに元気になった二人

イングリット「すごい、ライブが効いたみたいですよ。」

メルセデス「あら～？そんなはずはないんだけど・・・。
あ、先生・・・私は山賊退治より町に残って
怪我人の治療を続けたいと思っているんですが～。」

イングリット「たしかに・・・治療の手は足りていないようですね。」

エーデルガルト「私もそれがいいと思うわ、
山賊ぐらい私たちで問題ないでしょ。」

ベレス「わかった、メルセデスは残って治療をお願い。」

メルセデス「お任せください～。」

メルセデスを残し、3人は山賊退治のため出発した

この先で待ち受けている想像を超えた怪物の存在を知らず

使者「一人、町に残ってしまいましたか…
仕方ありません、彼女には大勢の前で
晒し者になってもらいましょうか…。」

メルセデス「さあ、これでもう大丈夫ですよ？」

怪我をした市民「ありがとうございますっ！」

セイロス教の教会で市民の治療を続けるメルセデス
プリーストとして優れた才能を持つ彼女は
的確に患者たちの傷を癒していく

その美しい美貌と人々を癒す姿から
患者たちからは聖女と呼ばれ称えられるメルセデス

だが、そんな彼女の前に…
荒くれた山賊が立ちふさがる

山賊「ほう、聖女様か…俺たちの傷も癒してくれねえか？」

突然、教会へと入ってきた数人の山賊たち…

市民たちは悲鳴を上げ怯え、
子供たちはメルセデスの背後に身を寄せる

メルセデス「…あなたたちがこの町を襲っている山賊ですか…？」

普段はおっとりしているメルセデスも緊張の色を隠せない

山賊「おうよっ！

隣の村を襲ったときに怪我しちゃってなあ…

ちょうどいいから聖者様に治療してもらおうと思ってな…頼むぜ？」

メルセデス「お断りします…

あなたたちを治療すればまた他の町を襲うのでしょ～？

諦めて騎士団に捕まった後でなら…治療しましょう。」

山賊「そんなこと言っているのかなあ？

こんな場所で暴れられたらあんただって困るだろお？」

メルセデス「…さすが山賊、卑劣ですね～、

でもいつまでそんな態度をとっていられるでしょうか？」

メルセデスはこの町に

セイロス騎士団が駐留していることを知っている…

この騒ぎに気付かないはずがない

しばらく時間を稼げば数人の山賊くらい

騎士団があっという間に始末してくれるだろうと…そう考えていた

だが…

メルセデス「…あら～…騎士団は何をしているのかしら。」

余裕の笑顔を見せていたメルセデスの表情に焦りが見え始める…

山賊「ああ、騎士団は隣の村に山賊が出た…

っていうデマを信じて出撃していったみたいだぜえ？」

メルセデス「…それは～…困ったわねえ…。」

しばらくの間、沈黙し静寂に包まれる教会内

山賊「さて、諦めて治療してもらえるかなあ？」

メルセデス「市民と子供たちには近づかないで…。」

山賊「ああ、約束するぜえ…それじゃ…
さっそく頼むぜえ。」

メルセデス「きゃああっ！???」

メルセデスの元へと歩み寄った山賊は突然ズボンを下ろし
反り立った肉棒をメルセデスの目の前に見せつけた

メルセデス「な…なにをしてるんですかあっ！？」

山賊「治療してもらおうとしてるんだよ…
ほら…その口で癒してくれよお
子供たちを守りたいんだろお？」

メルセデスが子供たちのほうを振り返る…
子供たちは何が起きてるのかまったくわかっていない様子で、
ただ股間を丸出しにした山賊を指さしクスクスと笑っていた

「山賊が裸になった～！」

「チ○コ出てる～！」

「チ○チ○でけえ～！」

テンションが上がる子供たちの後ろでは…

山賊の仲間が斧を構えて不敵な笑みを浮かべていた

メルセデス「わ、わかりましたっ！？」

メルセデスは恐る恐る肉棒へと口を寄せ…
ゆっくりと舌を伸ばしそっと舌先で触れた

山賊「ほら、もっと気合い入れてやれよお！
そんなんじゃ治療になれねえぜえ？」

メルセデス「……。」

メルセデスは意を決したように…口を大きく開くと肉棒を口の中に受け入れゆっくりとしゃぶりはじめた

その様子を見ていた子供たちは、それが何を意味しているのか理解できていなかったが大いにテンションが上がり騒いでいる

周囲の大人たちは、子供たちを守るためにメルセデスが体を張って無理していることを理解していたが目の前で山賊の股間に顔を埋める聖女の姿に興奮しているものがほとんどであった

メルセデス「んっ…んんっ…！！」

山賊「ほう、意外と上手いじゃねえか？もしかして経験済みかあ？ヤリマンだったのか？」

メルセデス「んんんっ！？」

肉棒を啜えながら必死に否定するメルセデス…だが周囲からはざわめきが沸き立つ…山賊の言葉を信じてなどいなかったがもしかしたら…と思い興奮する男たちがいた

メルセデス「はあ…はあ…さあ、これでいいでしょ～…早くここから立ち去ってください！」

山賊「そうはいかねえぜ…お次は…こっちのお口で楽しませてもらおうか！」

メルセデス「きゃあああああっ！？」

山賊に抱き着かれスカートを捲りあげられた

白い肌と下着が周囲の人々の目にさらされ
子供たちからも、パンツ見えた、と声上がる…
だが…

山賊はそれに留まらず下着を一気に下ろすと
メルセデスの両足を抱えて周囲に丸出しになった秘部を見せつける

メルセデス「いやあああああっ！？
見ないでください〜っっ！??」

食い入るように見つめる男たちと
悲鳴を上げる女たち…

そして…

山賊「じゃあ、挿れるぜえっ！！」

メルセデス「いや、待ってえ〜！！」

山賊はメルセデスを抱えたまま肉棒をアナルへと押し当てた

メルセデス「えっ…そっちはお尻のっ！？」

山賊「みんな秘部をもっと見たいらしいからなあ
アナルから楽しませてもらうぜえ！」

メルセデス「いやあああああっ！？ 痛っ！??」



肉棒が強引にメルセデスの尻穴へと押し込まれていく

苦痛に顔を歪めるメルセデス

その様子を見守る周囲の人々…

教会はいつの間にかメルセデスを辱めるショーの会場と化していた

メルセデス「ああああっっ！？痛いっ…そんな…動かないで～！！」

肉棒が挿入され下から激しく突き上げられる

激痛に涙を浮かべるメルセデス…だが
周囲の人々を心配させないために必死で耐え作り笑顔を浮かべる…
がこれが大きな失敗となる

山賊に犯されながら笑っている…と誤解を受け
本当にヤリマンだったのかと疑惑が深まっていく

メルセデス「だ、大丈夫ですっ！心配しないでくださいねっ！」

市民「本当に聖女様は…。」

「楽しんでるのか…？」

山賊「ほう、大分余裕があるようだな…それなら
二穴同時に試してみるとしようかあ？」

もう一人の山賊がメルセデスの正面から近づき…
ゆっくりと肉棒を秘部へと押し当てる

メルセデス「だめっ、同時に二本なんて…
おかしくなっちゃおう～！！」

山賊の肉棒がゆっくりとメルセデスの膣内へと挿入されていった…



あはあああつ!?!
すごい気持ちいいわあつ!
中に…私の中にもっと出してえつ!

メルセデス「あはああああつ!?!だめええっ〜!!!」

もともとおっとりした喋り方が特徴なためか
犯されていても緊張感が無いためか
ヤリマンだという疑惑がより深くなっていく

メルセデス「あはあああああつ!!!!??」

二穴同時に攻められメルセデスは限界を迎えた
苦痛だったはずの体…

しかし必死に耐え平然なフリをしていくうちに
体はその苦痛を受け入れいつの間にか快感へと変わっていった…
大量の潮を吹き絶頂を迎えたとき、それに気づかされた

メルセデス「あっ…ああああ…私っ…どうしてっ…？」

自分で自分がわからなくなる

山賊「お前は本当は淫乱な女だったんだなあ？
心配すんな、俺たちだけじゃなく
ここにいる連中全員がお前を犯したがつてるぜえ？」

メルセデス「全員が…わたしを…っ…？」

体が熱くなり不思議な気持ちになる
多くの人が興奮し自分の体を求めている…
その気持ちが他者を救いたいという彼女の願いと重なり

メルセデスは両足を開いたまま
肉棒を反り立たせた市民の男を受け入れてしまう…

メルセデス「あはああああっ！！？」

これも1つの救いの道だと…
メルセデスは自分が進むべき新たな道を見つけた

・その頃…ベレスたちは

ベレス「この辺りに山賊のアジトがあるらしい。」

イングリット「森は深いですね…
迷えば簡単には抜け出せないでしょう。」

エーデルガルト「魔獣も潜んでいそうね…
遭遇しないことを祈るわ…。」

山賊のアジトとされる洞窟付近まで到着した3人
周辺は既に騎士団が調査を終えているために危険はないはずだった
だが…

イングリット「何かおかしいな気配がしますね。」

エーデルガルト「不用意に森に入らないほうがいいわ…
イングリッド聞いているの？」

イングリット「ですが…魔獣を放置すれば周辺の町に
危険が及ぶ可能性があります、可能な限り退治しておくべきですよ。」

エーデルガルト「私たちの任務は山賊退治よ…
その魔獣がもし奴らの手がかかっていたら…。」

何かを言おうとして口を閉ざしたエーデルガルト

ベレス「…無理に魔獣を捜索する必要はないわ、
今は山賊のアジトを目指すべき…。」

エーデルガルト「先生の言う通り…今は…
イングリット…？」

理想の騎士を目指す正義感の強いイングリットは
一人魔獣を探し森の中へと歩き出していた

エーデルガルト「ああ、もうっ！
先生はここにいて…全員森に入って迷ったら大変だから
私はイングリットを連れ戻すわ。」

ベレス「わかった…ここで待ってる。」

イングリット「少しでも魔獣の数を減らさないと。」

魔獣による被害は各地で確認され増大し続けている
その被害を減らしたいという想いは決して間違っていない

既に数か月…士官学校で学び
入学当時と比べて格段にレベルが上がったと
自負しているイングリット
その過剰な自信が彼女の弱点となる

イングリット「深い森ね…
さすがにこれ以上離れると迷うかもしれない…
魔獣探しはこの辺で終わらせて…。」

魔獣に遭遇しないまま引き返そうとした時

イングリット「えっ、なにっ…きゃあああああっ!？」

突然足に絡みついた一本のツタ…

そのツタは足へと巻き付きさらに右手…
左手…と順番にツタが絡みついていき
イングリットの体は宙へと引き上げられた

イングリット「何なのコレっ!？まさかっ!？」

今まで聞いたことがない動く植物…
イングリットはこれが新たな魔獣の一種ではないかと考えた…

ツタの根元を視線で辿っていくと…
そこには巨大な木のような外見をした巨大な魔獣本体の姿があった

イングリット「こんな魔獣が…存在しているなんて…
うっ、だめっ！身動き取れないっ！？」

両手足を拘束され得意の槍をふるうこともできない

イングリット「このままじゃっ…きゃあっ！？
なんでツタが…いや…下着が見ちゃうっ！？」

ツタがイングリットの両足を大きく開く
下着が完全に丸見えになっていたが
イングリッドにはどうすることもできない

イングリット「先生…エーデルガルトさんっ…。」

一人で行動したことを後悔する…
だが既に手遅れであった
イングリットの股間へと迫る触手…
その先端から伸びる赤い物体
まるで人間の肉棒を模したかのようなその先端は
イングリッドの秘部を目指し一直線に進んでいく

イングリット「な、なにこれっ…
うそでしょう…これってまさかっ！？」

下着の上から先端が秘部を愛撫しはじめると
イングリットは自分に迫る危険をようやく理解した

イングリット「うそ…なんで一体何が目的なのっ！？
うっ、だめ…そんな擦らないでっ…
ああああ、いやっ、入ってきたああっ！？」



下着がずれ一気に秘部へと密着し膣内へと入り込んできた触手…
膣内の最深部にまで入り込み激しく動き回る

イングリット「あがああああっ!？」

その激しすぎる刺激に悲鳴を上げた

エーデルガルト「こんなところにいたのね、イングリット…
な、なによこれっ!？」

イングリットの悲鳴を聞きつけ駆けつけたエーデルガルト
彼女の目の前には触手に拘束され
秘部を弄ばれるイングリットの姿があった

エーデルガルト「奴ら…こんなものまで作り出してるのっ…!？」

イングリット「あああああっ!？」

触手に攻められるイングリット…
エーデルガルトの位置からは膣内を激しく刺激する
触手がハッキリと見える…

その光景に思わず見とれてしまいそうになるが

エーデルガルト「いけない…何を考えているの
今すぐ助けるわっ!」

斧を抱え上げイングリットを拘束する触手へと切り下そうとした時…

背後から迫る巨大な影の存在に気づいた

エーデルガルト「えっ…!？」

エーデルガルトの背後から現れたのは巨大な魔獣
もっともよく出現するタイプの狼型の魔獣に見えた
だが、その魔獣の股間から伸びた肉棒の存在を
エーデルガルトは見逃さなかった…

エーデルアルド「こいつも…やつらの作品というわけ…？」

これがすべて奴らの用意した罠だと理解したエーデルガルト

魔獣はエーデルガルトの体へと舌を伸ばし…
股間を激しく舐め回してくる

エーデルガルト「あっ！？ああ…なんなの
私の体…どうしてこんなに気持ちが高ぶるのよっ！？」

自分の変わってしまった体にイラつきを隠せないエーデルガルト

自ら服を脱ぎだし…下着を下ろし
魔獣の舌を受け入れる

エーデルガルト「あううっ…そんな…激しいっ！？」

秘部を舐め回され喘ぐその姿はどこか嬉しそうにも見える

自ら両足を開き頬を赤らめる

魔獣に押し倒されるように
そのまま背後にゆっくりと倒れたエーデルガルトは大きく両足を開き
魔獣の肉棒を受け入れる態勢を整えていた

エーデルガルト「……はやく…来て…。」

エーデルガルトの言葉に応えるように
魔獣の肉棒がエーデルガルトの膣内へと一気に挿入されていく

エーデルガルト「うああああああっ! ???」



魔獣の肉棒を受け入れ激しく悶えるエーデルガルト

エーデルガルト「あああ、すごいわっ！！
こんな感覚…はじめてっ！！！」

人間相手では決して味わえない快感に一瞬で魅了されていた

その激しく荒々しい腰使い…
今までの辛い記憶を全て忘れさせてくれるほどに快感であった

イングリット「あああああ、だめえええええっ！？」

エーデルガルトのすぐ横で触手攻めにされていたイングリット
目の前にエーデルガルトと
他の魔獣がいるということにも気づかないほど追い詰められていた

イングリット「あああダメ…もう…限界です
出ちゃいますうっ！！！！??」



絶頂を迎え大量の潮を噴き上げた

イングリット「あはあっ…あああああっ。」

ぐったりと触手に身を預けたまま放心していた…だが

イングリット「あっ…ああああっ！？ お尻にっ！??」

新たな触手が尻穴を押し広げ入り込んでくる

イングリット「ああああああああっ！！??」

イングリットの悲鳴…だがその口元にはうっすらと笑みが浮かぶ…

エーデルガルト「あああ、もうダメ…気持ちよくて何も考えられないわっ！！！！??」

魔獣に完全に体を預けているエーデルガルト
理性も崩壊したただ快樂だけを求める女と化していた

エーデルガルト「あはあああんっ！！！！??」

大量の潮を何度も噴き上げる

エーデルガルト「もっと…もっと私を気持ちよくしなさいっ！！！！」

強い口調で魔獣に命令するかのよう語りかける

魔獣は…その命令を聞いたかのように
さらに激しくエーデルガルトの体を揺さぶった

エーデルガルト「あはああああああっ!？」

そして大量の精液がエーデルガルトの中に射精されたのだった

エーデルガルト「ああああああああああっ!!!」



大量の精液で腹部が大きく膨らみ
全身精液に塗れたまま放心するエーデルガルト

次期皇帝とは思えぬほどに墮落した姿だったが
その表情は満足感に満ちたものだった

ベレス「遅いな…魔獣がいたのか…な？」

一人、生徒たちの帰りを待っていたベレス…
だが…彼女もまた溢れる性欲を抑えきれずにいた

下着を下ろし激しく自慰行為に浸っていた

ソティス「な、なにをしておるのじゃっ!？」

ベレス「だって…我慢できないんだもん…っ!!」

ソティス「こんなところで、するやつがおるか!?
誰かに見られたらどうする!山賊がおるのじゃぞ!!」

ベレス「山賊…!? そうだ、山賊がいる…
ちょっと抱かれてくる…。」

ソティス「な、なにを言っておるかあ!ベレス!
聞いておるのかっ!??」

ソティスの言葉も届かず山賊のアジトへと
下半身丸出しで歩き出したベレス…
歩きながら服を次々に脱ぎ捨て…
アジトの前につく頃にはほぼ全裸の姿となっていた

山賊1「うおおっ！？」

裸のベレスの登場に驚いた山賊

山賊2「なんだ、どうしたっ！？
うおあっ、なんで裸の女が…しかもすげえ美女…。」

ベレス「山賊さん…私を抱いてくださいっ…！」

山賊1「一体何なんだ…どうなってる？ 罨か！？」

山賊2「おい、あの顔色の悪い男が言ってた女…
こいつじゃないのか？」

山賊1「先生ってやつか？ 裸だとは聞いてねえぞ？」

ベレス「あ、それ私ですっ…。」

山賊2「やっぱりか！？
襲うよう頼まれたってのに…意味がわからねえぞ…。」

ベレス「そんなことどうでもいいでしょ？
早く抱いて欲しい…。」

ベレスの完璧なスタイルと豊満な乳房…
綺麗なピンク色の乳首に魅了される山賊達

状況はよくわからないが
こんな全裸の美女を放っておくほど彼らに道徳心はない

山賊2「まあ、いい…もとから予定していたからな…
よし、こっちへ来いっ！」

ベレス「あああっ…!？」

乳房を鷲掴みにされ洞窟の奥へと連れ込まれるベレス

山賊1「こうなったからには…
たっぷりと俺たちの相手してもらおうぞっ!？」

ベレス「はい…お願いしますっ！」

奥にはさらに数人の山賊たちの姿があった…
彼らは全裸のベレスに驚きを隠せなかったが

ベレス「はやく…挿れてっ！」

男の上に跨り肉棒を自ら秘部へと招き入れ
激しく腰を振り出したベレス

左右の手には肉棒を握りしめ順番にしゃぶっていく

そんなベレスの淫乱な姿を見た山賊たちは興奮し
ベレスの体へと手を伸ばしていく

ベレス「あああああっ!!もっとな…もっとな激しくしてえっ！」



ベレスと山賊の宴は一晩中続き…

翌朝、魔獣から解放されたエーデルガルトとイングリットが
洞窟へとたどり着いた…

そして昼過ぎには町から連れてこられたメルセデスが合流…

それぞれこんな場所での再会を驚いていたが
その後は山賊達との激しい乱交パーティーが始まった

使者「これは…我々の想像を超えています…
何とか手を打たないと…。」

士官学校の女神たち

4章

ベレス「御呼びでしょうか、レア様…。」

大司教レアから呼び出しを受けたベレス

レア「ベレス…私があなただを呼んだ理由、わかりますね？」

ベレス「は、はい…。」

しょぼんとした様子で顔を伏せるベレス

レアから呼び出された理由…

それはもちろん、士官学校で風紀が大きく乱れていること
その中心にベレスがいることについての説明を求めるためだ

レア「あなたが年頃の女の子だということは理解しましょう…

そして何者かの力が動いているということも…

私が必ず解決してみせます…。

だからあまり無茶をしないで…

あなたの体はあなただけのものではありませんから…。」

ベレス「…えっ…？」

レアの言葉に一瞬ドキっと心が揺れ動くベレス…

だがレアの言葉はベレスが考えたものとは違ったようだ

レアはベレスに対し…理解できない感情を頂いているようだった

レア「はあ、あの子にも困ったものですね…
あの年頃の女の子なら仕方ないのかもしれませんが…
それにしても…ベレスたちを陥れた勢力のことが気になりますね…。
かならず私がこの手で奴らを…。」

強い決意を胸に抱いたレア…

その時、レアの個室のドアをノックする音が響く…

従者「レア様、予定通り集まりました。」

レア「ああ、私もあの子を責められませんね…。」

レアの個室へと入って来たのは…数人の若い男たち
全員が熱狂的な教徒でありレアの信奉者たち…

レア「さあ、こっちへ…。」

レア「ああっ！？素晴らしいですわっ…！！」



ああっ!?!
素晴らしいですわっ!
さあ、もっと私を気持ちよくさせてっ
孕ませるつもりで中に出しなさいっ!

男の上で激しく腰を振り肉棒へと舌を伸ばすレア

その姿は普段彼女が見せている大司教という威厳ある
神々しい姿とはまるで違っていた

快樂に身を委ね、喘ぎ悶えるその姿は…
ベレスたちと何ら変わりはないように見える…

レア「私はこうしないと…耐えられないのですっ！」

射精された精液を口内で受け止め喉を鳴らして飲んでいく…

レアは過去に大切な人を失ったことが
今も大きな心の傷となっており
その傷を癒すために時折男たちと一時を過ごし
セックスでその悲しみを癒していた

ベレスと出会いその悲しみは大分癒え、
大きな希望を持つことができていたが…

快樂を覚えてしまった体は悲しみが希望に変わっても
時折、男たちの肉棒を求め耐えられなくなる

ベレスと出会いこんな事はもうやめよう…と誓ったはずだったが
結局今でもこうして名も知らぬ男たちに体を委ねる日々を送っていた

レア「ああああ、良いっ…中に…出ていますわっ！！」



あああああつ！
すごいですねっ…
こんな濃いものを出されたら…
本当に妊娠してしまいますわっ！
さあ、もつと…私に…

男の精液を躊躇いなく受け入れるレア
彼女にとっては慣れたもの
大司教であるレアの最大の秘密がここにあった

レア「ああ、やはり…私がベレスを責める資格がありませんね…。」

・その頃…修道院地下、秘密の会議場

かつては教会の幹部たちも集まっていたこの会場には
今は闇に蠢く者たちの使者と…教会幹部代表の男の姿しかなかった

使者「それで…いったいどうなっている？」

幹部「それがな…なんとも情けない話だが…。」

幹部の話しによると…

最初は学生たちを脅迫しその体を弄び
影響を強めていた幹部たちであったが

次第に女子学生たちが団結し、
体を弄ぶという強迫に屈しなくなっていくという…
そしてある時から、
幹部たちが学生たちから脅され弱みを握られ
今では完全に立場が逆転しているという…

使者「……最初のあの威勢の良さはどこへいった…？」

幹部「だが…お前たちのほうはどうなのだっ！？
あの教師やエーデルガルトを
特別授業で墮落させ服従させるきっかけを
与えるといったのはお前たちのほうだぞっ！？」

使者「…あの教師がこんな淫乱だとは想像もつかなかったからな…
それがエーデルガルトや他のモノに伝染していったようだ。」

幹部「打つ手が無いではないかっ…
これ以上動けばレア様にも知られ…ワシらは終わる…。」

使者「……。」

幹部の男はその場を立ち去り、
使者だけがその場に残された…

使者「まったく…こんなことになるとは…。」

幹部の前では強気な態度を崩さなかった使者だが…
一人になると頭を抱え込んでしまった

使者「なんなのだあの女たちはっ！？
なんで魔獣を手懐けることができるっ！？」

学生たちが森で出会った魔獣たちは…
性的な交流を深めることで想像以上に従順となり
今ではペットのような扱いを受け、
教会から隠れてこっそり森で飼育しているという…

使者「毎週森でやりまくっているし…
こっちが本来の主人だというのに…襲い掛かってくるし…。」

ぶつぶつと溜まっていた不満をつぶやく使者

彼も「闇に蠢く者たち」の中ではただの駒であり
任務に失敗すれば…あっさりとは始末されてしまうことだろう

使者「こうなったら…あの計画を進めるしかない…
死神騎士に…フレンを誘拐させ、「血」を持ち帰れば…
タレス様もきっとミスを帳消しにしてくださる…！！」

士官学校で新たな事件が幕を開けようとしていた

ベレス「んっ…あれは？」

深夜…ひっそりと中庭で生徒の肉棒をしゃぶっていたベレス

生徒「あぁっ、先生…もっと…！！」

ベレス「あれは…フレン？」

黒い鎧を来た何者かに抱えられた特徴的な緑髪の後ろ姿
それがフレンであることはすぐに理解できた

その様子が明らかに不振であったため…ベレスは
下半身を丸出しにしたままの生徒を放置し
黒い鎧の騎士の後を追って駆け出した

生徒「あぁ、先生…そんなっ！？」

ベレス「…たしかこっちに…？」

ベレスが駆けて行った先には…

セテス「あぁ、君かっ！？

フレンを見なかったか！？

こんな時間だと言うのに姿が見えないのだ！！」

激しく動揺したレア大司教補佐「セテス」の姿がった

妹…であるフレンがいなくなったと我を失い
ベレスの方を掴み揺さぶってくる

ベレス「あの…フレンなら…。」

セテス「フレンを見つけたら…すぐに私に知らせよ！！」

フレン「う…んっ…ここは…どこですか？」

目覚めたフレンは薄暗い場所にいた
自分が暮らす修道院とは違う…じめじめとしてカビくさい
地下のように感じられた

フレン「一体わたくしはどうしてここに？」

???「私に連れて来られたのだ…。」

フレン「きゃあ、あなたは!？」

フレンの目の前に現れた…骸骨のような兜をかぶった黒い鎧の騎士…

フレン「あなたは…今、町で噂になっている死神さんでしょうか？」

死神騎士「ふむ…たしかにそれは私のことだ。」

フレン「はじめまして、
まさか死神さんとお話しする機会があるなんて驚きました！」

死神騎士「……。」

フレン「それで一体私にどんな御用があるのでしょう？」

死神騎士「むう…手荒な真似はしたくないが…
目覚めてしまったのならば仕方ない…
こいつを使うとしよう。」

フレン「はいっ？」

死神騎士の合図とともに…配下の兵士が大きな樽を運び込んでくる

フレン「これは…？」

死神騎士「心配するな…少々くすぐったいかもしれんがお前を傷つける真似はしない。」

兵士が樽の蓋を開くと…そこから
粘々とした巨大なスライムが姿を現した

フレン「きゃあっ！？なんですかこれは！？」

死神騎士「大人しくしていればすぐに終わる…。」

フレン「きゃあああああっ！？」

スライムはフレンめがけて襲い掛かっていった

全身にスライムが纏わりつき悲鳴を上げるフレン…

このスライムは闇に蠢く者たちにより生み出されており
使者から死神騎士から貸し与えられたものだった

接触した者の体液を回収する生態をもっており
フレンの血を傷つけることなく奪うのに最適であった

死神騎士「ふむ…スライムに少女を襲わせるなど…
私がすべき事ではないな……あっ…！？」

フレン「いやあああ、服が溶けてしまいますっ!？」

スライムの粘液はフレンの服を溶かしはじめ
白い肌が次第に露出していく…



フレン「いやあああ、見ないでください〜!？」

死神騎士「あが…っ…なんなのだこれは…聞いていないぞっ!？」

服を解かされ乳房が丸出しになり下着までも溶け始め
同様に泣き出したフレンと

その目の前で動揺を隠せない死神騎士…
フレンには見えなかったが鎧の中は
想像を絶するほどの汗が溢れていた

ベレス「フレン…こんなところにっ!？」

フレン「あああ、先生っ!! 助けてくださいっ!？」

スライムに纏わりつかれほぼ体が丸出しとなったフレン

フレン「ふあああああああ、私の中に…
スライムが入ってますっっ!! ???」

ベレス「ス…スライムが…中にっ!？」

フレン「ああああ、中で動かないでくださいっ!？」

ベレス「!？」

フレン「ひあああああああっっ!! ???」



あああああっ!!
先生っ!!
私もう気持ちよくて
我慢できませんっ!
あはああああああんっ!!

膣内で動き回るスライム…
その刺激に耐えられなくなり絶頂を迎えてしまったフレン
その様子をじっと…顔を真っ赤にして見つめていたベレス
そして無言のままの死神騎士
場が沈黙に包まれた…

死神騎士「……どうしたものか……。」

ベレス「少女にこんな…卑怯な真似を…貴様…！！」

死神騎士「……………」

ベレスがつぶやくように言った一言…
死神騎士は何も言い返せなかった
鎧の中に溢れる汗はさらに多くなり
表情の無いはずの死神騎士の仮面がとても辛そうに見える

ベレス「フレン…私も…一緒に入れてくれっ！」

フレン「えっ…先生っ！？」

死神騎士「……ええええっ！？」

服を脱ぎ捨てスライム塗れのフレンへと抱き着いたベレス

死神騎士は今まで出したことが無い程大きな声で叫んでしまった

ベレス「ああ、これは…すごいっ！？」

フレン「先生…私のために…来てくれたんですねっ！！」

全裸で抱き合うベレスとフレン…
誘拐犯であるはずの死神騎士は完全に蚊帳の外となっている

死神騎士「……私のせい…か？ そんなはずはない…
あの男のせいだ…こんなスライムを用意するから…！
少女がこんな目に合うし…
これでは…わたしは完全に変態騎士ではないか！？」

次第にイラつきを隠せなくなっていく死神騎士

その時…
複数の足音が地下へと続く階段を駆け下りてくる音が
響き渡る…

死神騎士「まずい…こんなところを見られる訳にはっ！」

死神騎士の仮面が一瞬驚いているように見え…
そのまま転移の魔法で一瞬にして逃げるように消えていった

セテス「…こ…これはっ！？」

スライムに包まれたフレンとベレスを見て啞然とするセテスと…
学生たち…

ベレスはフレンを救出しようとしたが死神騎士の卑怯な罠にハマり
フレンと共にスライムの餌食になりかけたが
無事に死神騎士を追い払うことに成功し
フレン誘拐事件は終結した…

死神騎士の名は少女をスライム攻めにする悪名高き変態騎士として
フォドラ全土に知れ渡ることになる

・翌日夜…聖墓にて

ソティス「まったくお主というやつはっ!？」

再びソティスから叱られているベレス

ソティス「自分からスライムに飛び込む奴がおるかっ!
そのせいでフレンという娘も
おかしなプレイに目覚めてしまったではないか!!」

ベレス「あの時は助けようとただ必死で…。」

ソティス「嘘をつけ!

お主はただ自分も気持ちよくなりたかっただけであろう!？」

ベレス「…うっ…。」

ソティスはベレスの性欲の強さにあきれ果てたように座り込み…
ため息を漏らす

ソティス「このままではいずれ

身を亡ぼすことになるやもしれんぞ…？」

ベレス「…ソティスは…性欲が溜まらないの？」

ソティス「なっ!？ 馬鹿を言うな!!

わしがそんな…わけなからうっ!!」

ベレスの言葉を必死に否定するソティス…

ベレス「そうは思えない、ソティスだってやりたい時があるはず…。」

ソティス「なにを…馬鹿なことを…。」

ソティスが顔を赤くし身をもじもじとくねらせ始めた…

すると…その時…

ベレス「これって…ソティスが呼んだの？」

ソティス「馬鹿な…そんなことできるわけが…
いや、できるのか…わしにそんなことが？」

二人の前の前に現れた二体の魔獣…

巨大な仮面を被った魔獣と…

もう一体は人型でサイズも近く…

ソティスに合わせたサイズに調整されているようにも見える

ベレスは自然と服を脱ぎ捨て…魔獣にその身を預けてしまう…

ベレス「あああああっ！???」



ソティス「叱ったばかりだというのに…お主というやつは……！」

魔獣にいきなり肉棒を挿入され喘ぐベレス…
その表情は本当に気持ち良さそうな笑みを浮かべていた

ソティス「そんなに…気持ちいいというのか…本当に…。」

ソティスの元へと近づく人型の魔獣…
その魔獣はソティスの体を抱え上げると
反り立った肉棒の上に跨せるように座らせ
秘部へと肉棒を押し当ててくる

ソティス「ひっ…ひあああああっ!？」

普段のソティスとは違い
魔獣に触れられても不快に思ったり怒りをぶついたりはしない
なぜならこの魔獣はソティス自身が
自分の奥に秘めた性欲を満たすために生み出した存在であり
ソティスに触れることができるのもそれが理由である

ソティス「馬鹿な…わしはこんなことを望んでいるのか…
ベレスのような女になることを…？」

ソティスはゆっくりと
膣内へと入り込んでいく肉棒の感覚を感じながら…
自分にそんな淫乱な一面があることを気付かされた

ソティス「ふあああっああっ、入ってしまった…
わしの中に…こんな太いものが…入るなんてっ!？」

魔獣の極太の肉棒が根元まですっぽりと収まっていた

ベレスから受ける影響は想像以上に大きく
全身から感じるのはただ激しい快感だけ…

ああああっ!!
なんじゃ…この気持ちは…
わしはこんなことを望んでいたのかっ…!!
ふああああっ!!



ソティス「ううっ!? これは…たしかに悪くないの
こんな快感は…ひさしぶりじゃっ…ひさしぶり…?」

ソティスは遠い過去…失った記憶のなかにこ
んな快樂があったことを思い出した…

ソティス「そうじゃ…わしはこうやって…
誰かと交わったことが…!？」

記憶の一部を取り戻し途端にテンションが上がった
ゆっくりとだが自ら腰を振り出し、
さらに記憶の糸を辿ろうとするソティス

ソティス「ああ、よいぞ…この感覚覚えがあるぞっ…
ああっああ…この気持ちの高ぶりも…
何かを思い出させてくれる…!!」

愛液を大量に溢れさせ悶えるソティス

ベレス「ソティス…私と一緒に…!」

ベレスと視線を合わせ見つめ合う二人

ソティス「ふふっ…お主は想像を超えたところで役立つのうっ!!」

二人向かい合い激しく魔獣に弄ばれる

ベレス「あああ…ソティス見て…私の中に…
魔獣の精液が出てくるっ!??」

ソティス「わしの中にも出ておるっ!!ベレス…あああ!!」



同時に大量の射精を受け大声で叫び声を上げる
大量の精液で腹部を膨らませ体を痙攣させる二人…
二人の中により大きな絆が生まれた瞬間であった



・数日後…

ソティス「ところでベレスよ、
今日は一体なにとするつもりなのじゃ？」

ベレス「今日は…放課後、生徒達と約束があって…
夜は兵士たちと…。」

ソティス「なんじゃまた同じ相手か…
たまには挑戦してみたらどうなのじゃ？」

ベレス「挑戦って…もしかしてソティスが作り出した魔獣と？」

ソティス「そうじゃ！今回は自信作じゃぞ！」

ベレス「ふうん、悪くないかも…。」

ソティス「決まりじゃな！
では兵士たちとはさっさと終わらせて戻ってくるのじゃぞ！！」

ベレス「ふふ…わかったよ。」

その年の士官学校は
後の歴史に残るほどに乱れたものになったという…
そして5年後…

ベレス、生徒達はさらに乱れた動乱に巻き込まれることになる！？

士官学校の女神たち

5年後・・・



ああああっ!?
いやっ…やめてっ!?
そんなに激しくっ…ししないで!

クッ

アアアアアアアアアア

だめ……こんな感覚……
はじめてっ……うあっ！
うっ……うあああっ！！



ズッ

あああっ!?!
わたしにこんな事して…
ただで済むと…っ!?!
あああああっ、ダメエエ!!

ズッ

ズッ

あああああっ!?!
いやっ、中はダメっ!?!
あはああああっ!?!

ハッ

ハッ
ハッ





うっ…やめて…
こんなところで…
誰かに見られたら…っ!?

ズン
ズン

ズン
ズン

カッ

ズポッ

ズポッ

ケケケ

うあああつ！
ダメ…です、
こんな、こと…
やめて、くださいっ！

ゴキウ

ゴキウ

ゴキウ

あああああつ!!
中に、出ていますっ!!
私っ…、汚れて、しまいました…!!

ひああああつ！
ダメですっ、
ベルはまだ処女なんですっ！
うっ、あああああつ！？

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ



あううっ!?
ベルの中に…
熱いのが出てますっ…
だめ、妊娠しちゃうっ…!!

アッ
アッ

アッ
アッ





いやあああっ!!
痛いっ...やめてっ!
どうしてっ...こんなことっ...
あはああああっ!!

ズッ

バキッ



あがあつ…!!?
あはあああああつ!!
イクううううつ!!?

カ
カ
カ

カ
カ

カ
カ

カ
カ
カ

ポ
カ
カ
カ
カ

あああつ!!
そんなっ…私の中に
入ってきてますっ…!!
ペガサスの…大きいっ…です!!





だっだっ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

あああああっ!?
ペガサスの精液…熱いですっ
たくさん出てます…!!
私…こんな気持ち初めてです…

いやあああっ!!?
犬とするなんてっ…
ダメッ!!?
奥まで入ってきてるうっ!!?





ガッ

ヒッ

ヒッ

ズッ

うあああつ…!!
私…犬にイカされちゃった…
ああつ、ダメ…気持ちよすぎてっ…
おかしくなりそう…!?



きやあああああつ!?
魔獣の…太いのが…入ってきてるっ!?
いや、奥にまでっ…ああああああつ!?

ズズズ

ガッガッ

ズズズ



ゴッゴッ

ゴッゴッ

あはあああつああつ!!
中に…出てるうっ!!
だめえ、気持ちいいよおっ…!!
もっと…もっと気持ちよくして…



カッパッ

あああっ!!
お尻なんて…だめっ!
みんなが見ているのにつ…
あああああっ!!

パンパン

カッパッ

あはあああっ!?
すごい気持ちいいわあつ!
中に：私の中にもっと出してえつ!

カッ
カッ
カッ

ポ
パ
ア
ア
ア

カッ

カッ

カッ
カッ



な、なぜ植物が…人をっ…!?
いやあつ、そこはっ!?
ダメ、中で動いてますっ!?
あはああああああんっ!!





ああああ、お尻までっ!?
だめ：体が熱くて…
なんでこんなに気持ちいいんですかっ!?
ああああ、もうダメエっ!?

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ポ
カ
カ
カ

あはあああっ!!
すごいっ…こんな太いの…はじめて
だめ、欲しくてたまらないのっ!
もつと奥に…中に出さないっ!!

ズッ

ズッ

カッ



あはあああんっ!?!
すごいもつと中に...たくさん出して...!!
もつと私を気持ちよくさせてえっ!!



カキカキ

あああっ!?!
もつと...もつと激しく...
私を犯してっ...!!
中に出してっ...!!

オオオオ

オオオオオオ

オオオオ

ああっ!!
素晴らしいですわっ!!
さあ、もっと私を気持ちよくさせてっ
孕ませるつもりで中に出しなさいっ!

クッ

クッ
クッ

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ





カッ

あああああつ！
すごいですねっ！
こんな濃いものを出されたら…
本当に妊娠してしまいますわっ！
さあ、もつと…私に…

ポッポッ

ポッポッ

ポッポッ

いやああっ!!
ネバネバしたものが...
わたしの中に入ってきてますわっ!!
だめ、そこはダメですわっ!!





カッカッ

あああああっ!!
先生っ!!
私もう気持ちよくて
我慢できませんっ!
あはああああああんっ!!

ピシャッ

ああああっ!!
すごい…太くて気持ちいいっ!!
奥まで届いてるっ…!!
もつと…気持ちよくさせてっ!

ズポッ

ズ
ク
ク

カク

あがつ…あああつ!?
お腹の中に…精液が溢れてるっ…
あああああつ!?



あああああっ!!
なんじゃ…この気持ちは…
わしはこんなことを望んでいたのかっ…!!
ふあああああっ!!





ド
ク
ン

ド
ク
ン

ド
ク
ン

ド
ク
ン



































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































